

平成 24 年度採択文部科学省 スーパーグローバル大学等事業  
経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援

## 世界で活躍するスマートでタフな 日中英トライリンガル人材の育成

### 平成 25 年度 事業成果報告書



杏林大学

## Contents

---

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| ・学長挨拶                                | 1  |
| ・経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業の概要及び5ヵ年計画 | 2  |
| ・平成 25 年度の事業実績(概要)                   | 4  |
| ・卓抜した語学力養成                           | 5  |
| ・スマートでタフな交渉能力の養成                     | 9  |
| ・協定校開拓・交流事業の拡大                       | 13 |
| ・学生の海外留学促進・支援                        | 25 |
| ・学生の国際力育成                            | 30 |
| ・大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制確立             | 37 |
| ・対外広報の展開                             | 42 |
| ・平成 26 年度事業計画                        | 43 |
| ・平成 24 年度事業評価 第三者評価委員会の開催概要          | 45 |

## 学長あいさつ



学長 跡見 裕

杏林大学では、教育理念として「優れた人格を持ち、人のために尽くすことのできる国際的な人材を育成すること」を掲げ、国際協力に貢献できる人材の育成に努めております。その中で、平成25年4月には Paul Snowden 副学長(国際交流担当)が、また平成26年4月に Robin Sakamoto (Alexander) 外国語学部長が就任し、教育・研究・社会貢献において、全学的にグローバル化を推進していく体制がより一層強化されました。

平成24年10月から外国語学部を軸とする本事業がスタートし、平成24年度はこの補助金により語学サロン、同時通訳スタジオ等の語学力を強化するための環境整備のほか、eラーニングの導入、アクティブラーニング教室の設置などを進めました。これらの教育・学習環境の活用により学生の語学力が向上し、平成25年度はTOEIC スコアや中国語検定、HSK などで多くの学生が目標レベルをクリアしたほか、外国語によるプレゼンテーション(全国大会)等で上位の成績を収めました。

更に、「スマートでタフな交渉能力」を身に付け、「杏林大学が目指すグローバル人材」を育成し、その成果を可視化するためのルーブリックやポートフォリオが検討され、試行段階に至っています。

また、学生の留学先となる海外協定校を39校まで拡大するとともに、海外インターンシッププログラムの開拓、留学中の危機管理等を含めた『留学ハンドブック』も新たに作成、更に留学中の学生に学内授業を配信するなど、学生の海外留学を促進・支援する様々な取り組みを行いました。その結果、平成25年度に海外に留学した学生数は135人となり、平成24年度の97人から飛躍的に増加しました。

グローバル人材育成推進事業の主役は「学生」だと考えます。学生の間にも本事業に対する関心と理解が高まり、予想(目標値)をはるかに上回る学生が海外留学を希望するようになりました。また外国語学部だけでなく、他学部にもこの機運が波及しつつあることを大変嬉しく思います。

# 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業の概要及び5ヵ年計画

取組学部・研究科等： 外国語学部(1,006 人)

## 【構想の目的・育成するグローバル人材像】

21 世紀の日本社会は、これまでも増して様々な分野でのグローバル化が進行し、国際的人材の必要性がより高まっている。また世界の諸地域、特に経済発展の著しいアジアの中で日本の国際競争力の向上は喫緊の課題である。

今後、日本が進める国際協力は国際競争と表裏一体であり、海外の国々と共に成長・発展するパートナーとして対等の関係性を構築することが重要である。

国際協力・国際競争においては、日本人としてアイデンティティを維持しつつも広い視野を持った国際人としての感覚を持つこと、すなわち自らの文化と同等に異文化の尊厳を尊重する姿勢が肝要である。この対等の関係性と誠意・熱意により醸成される永続的な信頼関係は、個人と個人の信頼関係、国と国との絆の構築に寄与する。さらに共に成長・発展する対等のパートナーとしての信頼と競争的關係は、理想的な国際協力へと発展し日本が尊敬される豊かな国とする礎となることが期待される。

## 【構想の概要】

外国語学部は、共通言語としての英語に加え、中国語教育に重点をおいてきた。中国語と英語をツールとすることは、アジアでのビジネス展開や交渉の場で活躍する第一歩であり、ひいては全世界への飛躍につながる。

本事業は、「卓抜した語学力」と「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を養成することを目指す。外国語学部の語学教育をさらに強化するとともに、アジア・中国に軸足を置いた学際的な教育資源を持つ総合政策学部と連携し、最終的には学内外への成果の波及を図るものである。

### 1. 卓抜した語学力の養成

「卓抜した語学力」とは「責任ある仕事を遂行できるレベルの語学力」を意味します。独自に開発した実践的語学教育プログラム(CIC、PEP 等)を少人数クラスで実施することに加え、ネイティブスピーカーと目標言語のみでコミュニケーションをする「中国語サロン」「英語サロン」の常設、中国の名門大学から来ている留学生との積極的な交流、eラーニング、BBC・CNN・中国国営テレビ等の常時放映・視聴、同時通訳システムの積極的活用などを通して、より実践的な語学力の習得を目指す。

## 構想の概要

### 建学の教育理念

『人のために尽くすことが出来る 国際的な人材育成』

### 背景・実績

- ◆日・中・英3言語教育の実績【外国語学部】
- ◆アジア・中国に軸足を置いた教育・研究資源【総合政策学部】
- ◆国際協力の実績【国際協力研究科（大学院）】

卓抜した語学力とスマートでタフな交渉能力を備え、世界で活躍できる人材を育成する。

## グローバル人材育成方法(1)

### 《卓抜した語学力》

- ・独自開発のプログラム(CIC・PEP)を5名程度の少人数クラスで実施。

CIC : Chinese for International Communication

PEP : Practical English Program

- ・「中国語サロン」「英語サロン」の常設
- ・キャンパス内の中国語・英語エリア拡大
- ・協定校からの外国人数員招聘



## 2. スマートでタフな交渉能力の涵養

「スマートでタフな交渉能力」とは「自他の文化と教養に精通し、文化的慣習をわきまえ、対等に交渉することで創造的な結論を導き出せる能力」を意味する。「国際関係論」「アジア政治論」等の総合政策学部開講科目の履修に加え、PBL形式のディベートシミュレーションである「ケーススタディ演習」を通して、一般的な語学検定試験のスコアには表れにくい「問題発見力」「問題解決力」「自己表現力」を養成する。留学等の「プログラム修了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」を中国語あるいは英語で行い、母語話者との質疑応答能力を外部評価委員が判定することで学習成果の評価を行う。

## 3. 海外留学、研修の推進

「卓抜した語学力」や「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を育成するために、海外留学は極めて重要な位置を占める。本学では、独自の奨学金制度や授業料等減免制度による経済的支援のほか、専門の教職員による留学前・留学中・留学後のきめ細かな指導・支援を行っており、留学を通して、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなシステム「主体的な留学プログラム（Active Studying Abroad Program: ASAP）」により、学士課程終了まで一貫したサポート体制を整備し、学生の海外留学・研修の推進をしていく。

## グローバル人材育成方法(2)

### 《スマートでタフな交渉能力》

総合政策学部開講科目の  
積極的な履修を推進

「国際関係論」「国際経営学」  
「アジア政治論」「アジア経済論」等



ケーススタディ演習

PBL形式のディベートシミュレーション



- ・「中国語で学ぶ」専門科目開講
- ・産学・高大院連携シンポジウムの開催
- ・国内外でのインターンシップ・ボランティア活動の積極的奨励

## 学習成果の確認

### 《卓抜した語学力》 — 検定試験を活用 —

|     | 中国語学科<br>(日中通訳翻訳プログラム)                                 | 英語学科<br>観光交流文化学科                              |
|-----|--------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| 中国語 | ・HSK5級以上<br>(中国一流大学入学レベル)<br>・中国語検定2級以上<br>・通訳案内士(中国語) | ・HSK2級以上<br>(日常会話レベル)<br>・中国語検定4級以上           |
| 英語  | ・TOEIC500点以上<br>・TOEFL iBT52点以上<br>・IELTS4.5点以上        | ・TOEIC800点以上<br>・TOEFL iBT80点以上<br>・IELTS6点以上 |

### 《スマートでタフな交渉能力》 — 外部委員による客観的評価 —

プログラム修了プレゼンテーション

中国語あるいは英語で  
プレゼンテーションを行い、  
学習成果を評価

卒業研究報告会

中国語あるいは英語で発表し、  
母語話者との質疑応答能力を評価

## 「主体的な留学プログラム」と留学支援体制

### 「主体的な留学プログラム」Active Studying Abroad Program

留学を軸に、語学能力向上に加え、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなスキーム

【事前準備】

- ・語学力向上(CIC・PEP)
- ・教養知識の涵養
- ・留学目的の明確化

【留学】

インターンシップを含む  
現地での生活体験を通して、  
語学力と異文化理解力の涵養

【留学後展開】

・プログラム修了  
プレゼンテーション  
・ゼミナールでの専門的  
個別指導

海外留学の積極的支援(現在の海外協定校は32校、今後5年で50校まで拡大予定)

1. 交換留学では留学先の学納金免除
2. 派遣留学では本学学納金8割減免
3. 海外研修・留学奨学金制度の継続的な拡充
4. 留学先で取得した単位を卒業要件単位に認定
5. キャリアサポートセンターを中心とする留学中・帰国後の就職活動支援



## ー平成 25 年度の事業実績(概要)ー

### ○本事業の推進体制

理事長・学長の強いリーダーシップのもと、平成 25 年 4 月に Paul Snowden 副学長(国際交流担当)が、また平成 26 年 4 月に Robin Sakamoto (Alexander) 外国語学部長が就任したことにより、教育・研究・社会貢献において、全学的にグローバル化を推進していく体制がより一層強化された。



Paul Snowden 副学長(国際交流担当)



Robin Sakamoto (Alexander) 外国語学部長

- (1) 学内における運営推進基盤として、本事業の構想責任者である学長を委員長とし、全学部から選出された教員及び事務職員からなる「プログラム推進委員会」が設置されている。本委員会は毎月定期的な会合を重ねており、事業推進に関わる重要事項の検討・決定、事業成果の点検等を行っている(平成 25 年度は 11 回開催)。

本事業の経過・成果は、毎月運営審議会(重要事項の審議および理事会と教授会の調整を行う機関)に報告しているほか、学内報告会も行い、本事業の趣旨・遂行状況、事業成果を学内で共有することにより全学部で語学学習、海外留学に対する関心が高まり、外国語学部以外の学部からも多くの学生が海外留学・研修に参加するようになった。また、クイーンズランド大学(オーストラリア)で開催された「CLIL(Content and Language Integrated Learning: 専門科目・言語統合型学習)研修」への教員参加(外国語学部 2 名、総合政策学部 3 名)による教育力アップや、職員の語学 e-ラーニングの普及、TOEIC 受験(128 名:700 点台は 5 名、800 点台は 4 名、900 点台は 3 名)など、大学全体のグローバル化が目に見えて進行している。

- (2) 平成 24 年度の事業成果報告書を取り纏め、プログラム推進委員会ならびに国際交流課を中心に自己点検を行った。また平成 24 年度の事業実績を対象に、第 1 回第三者評価委員会を開催した(平成 25 年 8 月 27 日 於・杏林大学三鷹キャンパス)。

第三者評価委員として内田勲氏(横河電機株式会社最高顧問)、ブルーストロナク氏(テンブル大学ジャパンキャンパス学長)、木村英樹氏(東京大学大学院人文社会系研究科教授)が審査にあたり、総評・助言をいただいた。(評価結果は 45～46 頁に掲載)

(3) 学生がグローバル人材像とその国際的通用性を明確に把握し、キャリアデザインを具体的に構築することができるよう、2 回のシンポジウムを開催した。

いずれのシンポジウムにも、語学力を活かしてグローバルに活躍している本学卒業生が登壇しているほか、産業界・各種団体・行政等からの参加者も得て、グローバル人材育成における産官学の有機的連携が図られた。参加学生のアンケート結果から、本シンポジウムは就業意欲の改革と「グローバルに活躍する人材」を目指す一つの動機づけになっていることが明らかになっている。

(4) グローバル人材育成に携わる外部講師を招き、グローバルな視点の涵養やキャリアデザイン構築に役立つグローバルセミナー(「インドで起業」(2013 年 4 月 25 日)、「総合家電メーカーWalton から見る 21 世紀の成長国バングラデシュ」(2013 年 10 月 22 日)、「インターンシップの教育的役割」(2013 年 11 月 6 日)他を計 6 回、八王子キャンパスまたは八王子市学園都市センターにて開催した。これにより、学生は様々な分野で展開されているグローバル化の一端に触れることができ、学習意欲の持続的維持・向上が図られている。

(5) キャリア支援に関する授業(業界研究・就職実践講座等)のネット配信事業を開始し、留学先での就職活動サポート体制を強化した。また、産業界と連携し留学後の就職支援のあり方を調査するとともに、関東圏を中心にインターンシップ研修先の調査と開拓を進めた。このような中長期的視座に立った留学支援も手厚く実施したことにより、平成 25 年度の海外留学・研修経験者数は大幅に増加した(平成 24 年度:97 人、平成 25 年度:135 人)。

(6) 日本の 3 大学・1 機関とフィリピンの 3 大学と共同で、双方の国の学生グループ同士がインターネットオンラインを利用し、トピックに基づいて英語でディスカッションする GEO(Global Education Online)プロジェクトの開始に向けた調整を行うとともに、本学教員がプログラム構築に参画した。

(7) 杏林大学が育成するグローバル人材像を能力ごとに明確化し、ルーブリックとポートフォリオを用いて学年ごとに可視化することにより、学生のグローバル人材としての成長プロセス、海外留学成果なども合わせて客観的に把握する方法が構築され、試行されている。

## ○卓抜した語学力養成

### 1. 同時通訳教室の活用

平成 24 年度の同時通訳練習スタジオの最新機器・備品を整備・拡充により、同時通訳メソッドを取り入れた高度語学力養成教育が可能になった。「卓抜した語学力」の養成を目的とし、日中同時通訳の理論から実践まで、様々なシーンに幅広く活用され、同時通訳システムを利用した授業が行われている。

平成 25 年度では、前・後期合わせて 14 コマの授業のほか、学生による自主的な学習にも利用された。また、海外の大学等と同時通訳における教育方法に関する教育交流にも大きな役割を占めている。





## 2. 特任教員

「卓抜した語学力」を涵養する、より実践的な語学授業を充実させるために、ネイティブスピーカーである特任教員 4 名（アメリカ 2、カナダ 1、中国 1）を引き続き採用した。これにより、最少 5 名の少人数教育が拡充するなど、外国語学部が独自開発した中国語教材 CIC (Chinese for International Communication) 及び英語教材 PEP (Practical English Program) を使用した語学の授業運営体制が強化された。さらに日本人教員と母語話者教員とが有機的に協働することで学生の留学準備に資するより実践的な授業体制を提供している。

## 3. 語学サロンの運営

ネイティブスピーカーといつでも気軽に会話を楽しめるコミュニケーションスペースとして、ガーデン丘(C 棟)2 階の国際交流プラザに中国語、英語サロンを常設している。各サロンには、中国語・英語の母語話者が常駐しており、学生は自由時間や空き時間に訪れ、特定の話題について留学生やネイティブスピーカーの教員と意見交換したり、会話を楽しんだりすることができる。また、日頃から母語話者と交流することで「国際的な対人コミュニケーションスキル」を着実に身に付けられる貴重な空間となっている。



サロン内には海外ニュース番組等が視聴できる大型テレビが設置されているほか、中国語、英語の関連図書も配架されており、国内にいながらにして海外留学に匹敵する程度に常時外国語に触れる語学教育環境が整っている。

毎月の利用者は増加しており、平成 25 年度には延べ 1,773 名が利用した。外国語学部のみならず、総合政策学部や保健学部の学生も利用しており、本事業の取り組みは他学部へも着実に波及している。また、学生の主体的な学修時間の確保ならびに学習内容の実践的な定着にも活用されている。利用学生からは、「授業で学んだことを実践できる場があって嬉しい」「生きた言葉のやりとりを実感できる」「空き時間を有効に使って実践的な語学学習ができるのはよい」といった感想が寄せられている。

## 4. チューターの活用

中国語サロン運営のため、特任教員だけでなく中国の一流大学から来ている留学生をチューターとして任用した。これにより、教室で学んだ中国語を実際に使う機会を与えるとともに、同年代のチューターと交流することにより、日本と中国の習慣の違い、中国の文化、習慣ならびに思想、コミュニケーション上のふるまい等を身につけることができるようになっている。

9 月以降は、ニュージーランドからの留学生を英語サロンのチューターとして任用した。それにより、より気軽に英語を話す機会を学生に提供でき、また、特任教員（アメリカ・カナダ）とは国籍が異なるチューターを配置することで、それぞれの国の文化や習慣、現地の考え方などを学ぶ機会を学生に提供することができた。



## 5. 英語プログラム“Practical English Program”(PEP)、

### 中国語プログラム“Chinese for International Communication”(CIC) の強化

外国語学部独自の中国語教材 CIC (Chinese for International Communication) 及び英語教材 PEP (Practical English Program) を使用した語学授業の運営体制が強化された。本事業採択後、特任教員の雇用により従来は日本人教員が担当していた外国語学部英語学科二年生の英語の授業(英語Ⅲ)を四分割して少人数化を図った(従来 20 名前後で運営していたクラスを 5 名程度にした)。また、一年生の英語の授業(英語ⅠとⅡ)では最上位クラスをそれぞれ二分割し、英語母語話者教員による留学を見越した少人数授業を実現した。これにより、留学準備に資するより実践的な授業体制を確立した。平成 25 年度は、外国語学部全学科一年生の英語の授業(英語Ⅰ、英語学科 5 クラス、中国語学科 2 クラス、観光交流文化学科 4 クラス、計 11 クラス)、ならびに英語学科二年生の英語の授業(英語Ⅲ、5 クラス)はすべて、本事業で採用した英語母語話者教員が担当した。CIC と PEP は、学生のニーズと現代社会の要請に応え従来から年度ごとに改良を加えているが、本事業採択により海外留学希望者が大幅に増加したことから、事業構想に即した学修成果が達成できるよう、「グローバル」をキーワードとした新たな改良に着手している。

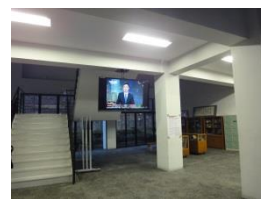
## 6. e-ラーニングの運用

授業以外に教室、自宅、留学先など、インターネット環境があればどこでも中国語と英語の学習ができる e-ラーニングシステムを導入した。学習履歴や達成度チェックなどを活用しながら自分のペースで着実に学習することができるため、学習時間の大幅な増加に加え、学習習慣の定着にも効果を発揮している。また、この e-ラーニングシステムの利用を正課授業(英語Ⅰ～Ⅳ、実用英語演習等)の評価基準の一つとして設定し、「1 日 2 時間以上の活用」を宿題として課すなど学習効果を高める方策を講じた。8 月には英語 e-ラーニングシステムをクラウド型からオンプレミス型に転換し、他学部学生への利用枠拡大を図った。これにより外国語学部のみならず、他学部にも開放され、学生の学修意欲を後押ししている。

中国語については、昨年度に引き続きクラウド型の e-ラーニングを活用し、外国語学部の学生を中心にライセンスを配付した。過去に実施された中国語検定試験問題を級別にオンラインで解答し自動採点されるシステムも備わっているため、中国語検定試験前の予行演習としても積極的活用が図られている。

## 7. 外国語放送の視聴

語学力強化のため、キャンパス内には、中国語(CCTV)及び英語(BBC 及び CNN)のニュース番組が受信・視聴できる設備を整えている。具体的には、ガーデン丘(C 棟)2 階に設置された中国語サロンと英語サロンに各 1 台ずつ、本事業の主体である外国語学部教育棟(E 棟)の入口に 1 台、国際交流プラザに 1 台の計 4 台が稼働しており、日常的に中国語または英語に触れる環境を提供している。



## 8. 語学検定試験の実施

学生の語学力の向上強化および本事業の成果を可視化するため、語学検定試験(中国語検定試験、HSK、TOEIC、IELTS 等)の受験を外国語学部全学科で積極的に奨励し、学習成果の可視化ならびに継続的な学修意欲の維持を図った。それらは、語学教育・学習の成果を測定・分析するデータの一つとして活用されているほか、語学授業のクラス分け及び語学教育の発展的改良に供されている(平成25年度の学内実施:外国語学部全学科を対象とするTOEIC IP 試験1回、留学経験者および留学予定者向けTOEIC SW IP 試験1回、新入生向けTOEIC-Bridge IP 試験1回、英語インテンシブクラス向けIELTS 試験1回、中国語検定試験2回)。

## 9. 語学力養成の成果

本事業での学修成果を活かし、本学の学生が以下の中国語・英語プレゼンテーション大会に参加した。討論テーマに関する状況分析・問題発見・問題解決案の策定・中国語や英語による情報発信を含むこれら活動は、「卓抜した語学力」と「スマートでタフな交渉能力」の涵養に向け学生が主体的に取り組むきっかけとなった。

- ・第3回全国大学生マーケティングコンテスト(4名)
- ・第31回全日本中国語スピーチコンテスト東京大会(8名)
- ・第2回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト(3名)
- ・グローバル人材育成フォーラム-世界を変えるアイデア-(5名)
- ・第7回森田杯・英文毎日杯 ペアで紹介する日本文化プレゼンコンテスト(2名)



### ■語学学習成果

#### (1)TOEIC

| スコア | 500～599 | 600～699 | 700～799 | 800～899 | 900点以上 | 備考 |
|-----|---------|---------|---------|---------|--------|----|
| 人数  | 74      | 40      | 18      | 10      | 1      |    |

#### (2)IELTS

| スコア | 4.0 | 4.5 | 5.0 | 5.5 | 6点以上 | 備考 |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|----|
| 人数  | 15  | 6   | 1   | 0   | 1    |    |

#### (3)中国語検定

| スコア | 5級 | 4級 | 3級 | 2級 | 1級 | 備考 |
|-----|----|----|----|----|----|----|
| 人数  | 0  | 37 | 19 | 6  | 0  |    |

#### (4)HSK(漢語水平考試)

| スコア | 2級 | 3級 | 4級 | 5級 | 6級 | 備考 |
|-----|----|----|----|----|----|----|
| 人数  | 0  | 0  | 2  | 11 | 0  |    |

## ○スマートでタフな交渉能力の養成

### 1. アクティブラーニング、ケーススタディ演習の導入による学際的授業の実施

グローバル社会において責任ある仕事を成し遂げるには、「卓越した語学力」に加え、「スマートでタフな交渉力」を兼ね備えている必要がある。そのための社会科学の基礎知識を身に付けるため、総合政策学部教員による専門科目の外国語学部での開講や、外国語学部生による総合政策学部開講科目の他学科履修奨励を通し、スマートでタフな交渉能力の基礎となる学際的教養の涵養を促している。その結果、総合政策学部教員による専門科目を履修する外国語学部生の数は平成25年度春学期・秋学期合計で延べ1,101名に上った。この学際的な知識を前提としたPBL型演習「ケーススタディ演習」は、外国語学部と総合政策学部の連携により、新設のアクティブラーニング教室を利用して開催されている。

「スマートでタフな交渉能力」を涵養する場として開設された最新鋭のアクティブラーニング教室は、学生や教職員の評価が高く、平成25年度は前期週21コマ(稼働率84%)、後期は週17コマ(68%)の授業のほか、FD・SD研修会や高大連携授業等にも積極的に活用されており、極めて高い教室稼働実績を挙げている。

このアクティブラーニング教室で総合政策学部と外国語学部との連携により開始された「ケーススタディ演習」は、「専門が異なる複数の教員による講義」と「学生・留学生中心の学習言語によるディベート」を基本コンテンツとし、両学部教員の指導のもと「尖閣諸島問題」「在中国日系企業の労働紛争」「日本企業の今後の中国展開」など社会的に関心が高い問題をテーマに行った。学生、留学生、教員が既に得ている情報とネットワーク等で得られる情報を分析し、立場や出身、また経験に基づいた熱い議論を展開した。立場を入れ替えたロールプレイでは率直な意見表明が行われた。これらは、対話力の向上のみならず、本事業が目指すところの、「自他の歴史や文化的慣習をわきまえ、創造的な結論を導き出すための交渉能力」の涵養に大いに資するものであった。これら主体的な学習を通して、学生は問題発見力・問題解決力・情報発信力を徐々に身に付けはじめている。

### 2. 杏林大学がめざすグローバル人材像及びスマートでタフな交渉能力の可視化

「創造的な結論を導き出すための交渉能力」は、語学検定試験と異なり点数・スコアとして成果を評価することが難しいものであり、ルーブリック等による客観的評価により成果を測る方法を確立することが課題となっていた。

平成25年度には「スマートでタフな交渉能力」を測定するためのチェックシートが作られ、「プログラム修了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」で活用されている。

平成26年度からは、杏林大学がめざすグローバル人材像を明確にし、その素養を学年ごとに可視化することにより、学生のグローバル人材としての成長プロセス、海外留学による成果なども合わせて可視化する方法が構築され、試行されている。

外国語学部では、語学検定試験のスコアを語学授業の成績に反映させる授業デザインをしており、学修成果の客観的な可視化を推進している。また、ルーブリックおよびポートフォリオの独自開発も進めており、入学時・留学前・留学後・卒業時等に自己・他己評価を実施することで、より客観的な評価方法を用いて学士課程における学修成果を可視化が可能となった。

## 杏林大学が育成するグローバル人材像とその可視化について

### 1. 杏林大学の取組み

杏林大学グローバル人材育成推進事業では、「世界で活躍するスマートでタフな日中英トライリンガル」の育成を目指している。

そのために、「卓抜した語学力」、「スマートでタフな交渉能力」を養成するとともに、「海外留学・研修でコミュニケーション能力、異文化理解・適応力」を培うこととしている。

1)「卓抜した語学力」とは「責任ある仕事を遂行できるレベルの語学力」を意味し、践的な語学力の習得を目指す。

2)「スマートでタフな交渉能力」とは「自他の文化と教養に精通し、文化的慣習をわきまえ、対等に交渉することで創造的な結論を導き出せる能力」を意味する。

3)「卓抜した語学力」や「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えた、グローバル人材を育成するために、海外留学経験は極めて重要な位置を占める。

本学では、独自の奨学金制度や授業料等減免制度による経済的支援のほか、留学を通して、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなシステム「主体的な留学プログラム (Active Studying Abroad Program: ASAP)」により、学士課程終了まで一貫したサポート体制を整備し、学生の海外留学・研修の推進をしている。

しかしながら、本事業(人材育成)の成果を可視化する際に、1)の語学力はTOEICやIELTS、HSK、中国語検定等の検定試験を利用して測定・可視化が可能であるが、2)の交渉能力や、3)の留学成果については、現在その測定・可視化の方法について研究・構築中である。

### 2. 可視化の方策

学生が入学から卒業まで、その間の海外留学・研修を経て、グローバル人材としての素養を身に付けていく、その成長過程をルーブリックとポートフォリオを活用して可視化していく。

ルーブリックでは、次の5項目についてそれぞれ6段階で自己評価をする。

1. 卓抜した語学力 (日中英トライリンガル)
2. 知識・理解、汎用的技能 (学士基礎力)
3. コミュニケーション能力 (スマートな交渉能力)
4. 異文化理解とグローバル的視野 (スマートな知性)
5. リーダーシップ・コンピテンシー (タフな交渉能力)

上記の5項目の評価をレーダーチャートで表示する。

自己評価するのは大学の8セメスター(4年間)の中で4回実施する。

- 1セメスター： 入学時
- 3セメスター： 海外留学前
- 5 or 6セメスター： 留学終了(帰国)後
- 7 or 8セメスター： 卒業前

入学から卒業までに評価・測定を4回実施し、これをレーダーチャートで比較することにより、個々の学生の成長を可視化する。

#### その他のメリット

- 入学時に自己評価・測定することにより、学生はグローバル素養として身に付けるべき事柄を自覚・認識することができる。
- 3セメスターと5 or 6セメスターの評価を比較することにより、海外留学の成果が可視化できる。
- 在学中に留学を経験した学生と、留学しなかった学生との比較が可能になる。

上記は、学生の自己評価・測定で行うが、「留学プログラム終了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」は、外部評価委員を含めた他者評価による可視化を行い、ポートフォリオに加える。

## グローバル素養項目及び測定方法

＝卓抜した語学力及び基本スキル＝

### 1. 卓抜した語学力【評価の視点】

(1) 英語学科・観光文化交流学科 ポイント＝(英語＋中国語)÷2

■英語 (TOEIC スコア)

①400 未満 ②400～499 ③500～599 ④600～699 ⑤700～799 ⑥800～

■中国語 (中国語検定、HSK)

①なし ②中検 6 or HSK1 級 ③中検 5 級 or HSK2 級 ④中検 4 級 or HSK3 級

(2) 中国語学科

■英語 (TOEIC スコア)

ポイント＝(英語＋中国語)÷2

①300 未満 ②300～349 ③350～399 ④400～449 ⑤450～499 ⑥500～

■中国語 (中国語検定、HSK、通訳案内士)

①なし ②中検 6 級 or HSK1 級 ③中検 5 級 or HSK2 級 ④中検 4 級 or HSK3 級

⑤中検 3 級 or HSK4 級 ⑥通訳案内士 (中国語) or 中検 2 級以上 or HSK5 級以上

### 2. 知識・理解、汎用的技能(学士基礎力となるもの)【評価の視点】

(1) GPA: 0～4

(2) 文章読解力

(3) 文章作成力

(4) 定量的スキル (数学、統計学、数的推理等)

(5) 情報リテラシー (PC、ネットワーク等)

(6) 学習の統合と応用力、生涯学び続けるための知識と姿勢

(7) 社会適応性 (ルール・マナー)、ボランティア

＝スマートでタフな交渉能力＝

### 3. コミュニケーション能力(スマートな交渉能力)【評価の視点】

(1) 相手の意見をよく聞き理解することができる

(2) 相手の立場、意見・考えを理解・尊重することができる

(3) 相手の立場、意見・考えを尊重した上で、自分の意見を分かりやすく述べることができる

(4) 過不足なく明快 (論理的) に議論を展開する

(5) 情報を発信する力

(6) 相手に働きかける力、説得する力

### 4. 異文化理解とグローバル的視野(スマートな知性)【評価の視点】

(1) 日本の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解 (ナショナル・アイデンティティ)

(2) 日本の良さを認識し、それを外国人にも伝えることができる

(3) 相手国の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解

(4) 相手国と日本の違いや共通点を認識している

(5) 国際経済、国際政治等の国際関係科目の履修と理解 (単位数・成績)

(6) 国際情勢、国際政治など時事問題に関する知識と理解

### 5. リーダーシップ・コンピテンシー(タフな交渉能力)【評価の視点】

(1) チームワーク (規律性、リーダーシップ、自己の役割の自覚)

(2) 全体の意見を調整し全体最適を構築する能力

(3) 好奇心と問題発見力、状況把握と問題解決力

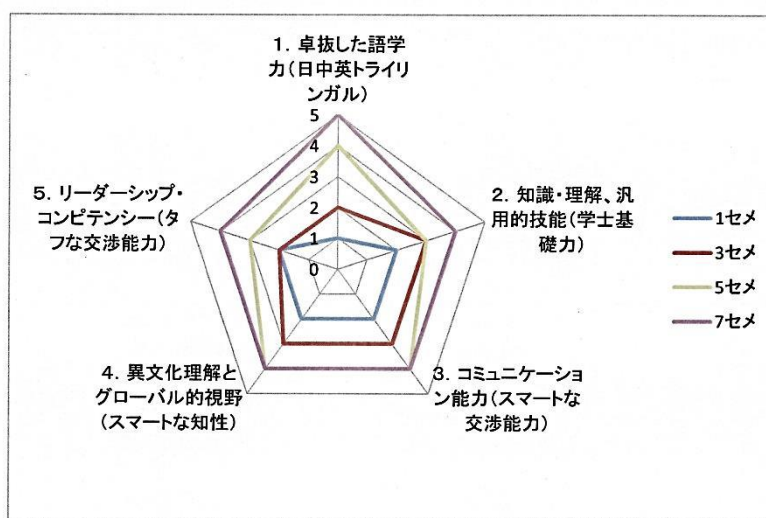
(4) 創造的思考、企画・提案力

(5) Vision をもち、長期的に何事にも真正面から取り組む力

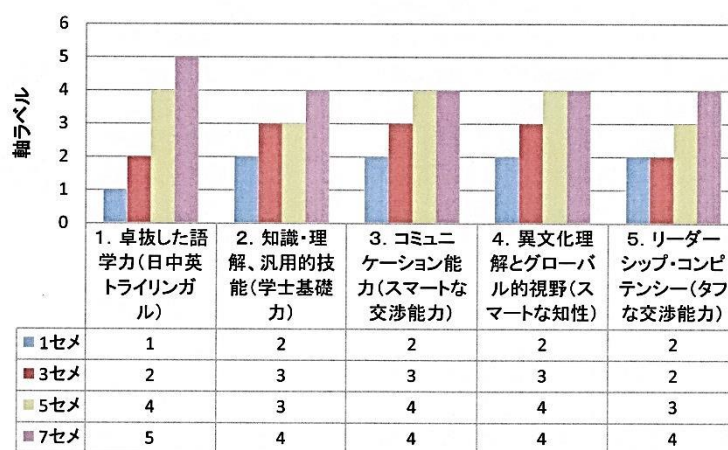
(6) ストレスコントロール

### グローバル素養の可視化 (Sample)

|                             | 1セメ | 3セメ | 5セメ | 7セメ |
|-----------------------------|-----|-----|-----|-----|
| 1. 卓抜した語学力(日中英トライリンガル)      | 1   | 2   | 4   | 5   |
| 2. 知識・理解、汎用的技能(学士基礎力)       | 2   | 3   | 3   | 4   |
| 3. コミュニケーション能力(スマートな交渉能力)   | 2   | 3   | 4   | 4   |
| 4. 異文化理解とグローバル的視野(スマートな知性)  | 2   | 3   | 4   | 4   |
| 5. リーダーシップ・コンピテンシー(タフな交渉能力) | 2   | 2   | 3   | 4   |



### グローバル人材素養の可視化





## ○協定校開拓・交流事業の拡大

平成 25 年度時点で中国語圏、英語圏の新規海外協定校 5 校が増え、13 か国・地域の 39 大学・機関と学術交流協定を締結している。

平成 28 年度までに海外協定校を 50 校へ拡大することを目的に、平成 24 年度に引き続き、今年度も 6 組の教員、職員の海外派遣を行った。協定未締結の 15 大学とは学生、教職員交流を内容とした学術交流協定について協議を行い、そのうちの 6 大学とは協定書の調印を終了、もしくは締結の検討を行うことができた。既に協定校である大学等については、今後の学生交流プログラム拡大の可能性、現地サポート体制、授業内容等の確認を行っただけでなく、教材の共同開発、シンポジウム開催への協力など幅広い展開が期待できることを確認することができた。なかには具体的なプログラムにより募集を開始したものもあり、今後も更に交流の拡大を推進していく。

協定の可能性のある欧米の大学では、本学学生の受入に積極的であり、多彩なプログラムを提供できるところが多くあった。英語圏の大学では、本学のキャンパス移転に合わせて外国語学部 2 年次の 1 学期留学というアカデミックプランについて話し合うことができた。多くの大学はとても好意的であり、本プランについて本格始動する平成 29 年度までの試験的实施に賛同を得ることができた。

中国語圏の大学では、従来の協定交流に加えて、さらに国際交流の幅を広げ深めるために率直な意見を聴取し、両校のさらなる交流の可能性を見出すことができた。

これらの活動はグローバル人材育成推進事業の目的である日中英トライリンガルの育成にも十分対応可能な交流発展に繋げる事ができた。



## 学術交流協定大学一覧（H25 年 3 月 現在）

|    | (国／地域) 協定大学名                         |
|----|--------------------------------------|
| 1  | (香港) 香港中文大学                          |
| 2  | (オーストラリア) ウーロンゴン大学<br>英語センター         |
| 3  | (イギリス) イーストアングリア大学                   |
| 4  | (韓国) 乙支大学校                           |
| 5  | (中国) 河北大学                            |
| 6  | (台湾) 国立政治大学                          |
| 7  | (ベトナム) ハノイ国立大学<br>社会科学人文科学大学         |
| 8  | (韓国) 高麗大学校                           |
| 9  | (台湾) 南台科技大学                          |
| 10 | (タイ) マヒドン大学                          |
| 11 | (韓国) 建陽大学校                           |
| 12 | (韓国) 韓瑞大学校                           |
| 13 | (イギリス) マンチェスター大学                     |
| 14 | (中国) 天津外国語大学                         |
| 15 | (台湾) 大仁科技大学                          |
| 16 | (ケニア) ケニア中央医学研究所                     |
| 17 | (中国) ハルビン医科大学                        |
| 18 | (シンガポール) シャーテックシンガポール<br>国際ツーリズムカレッジ |
| 19 | (中国) 北京第二外国語学院                       |

|    | (国／地域) 協定大学名                       |
|----|------------------------------------|
| 20 | (中国) 杭州師範大学                        |
| 21 | (中国) 浙江工業大学                        |
| 22 | (中国) 北京外国語大学                       |
| 23 | (中国) 北京語言大学                        |
| 24 | (中国) 大連外国語大学                       |
| 25 | (中国) 上海外国語大学                       |
| 26 | (中国) 広東外語外貿大学                      |
| 27 | (ニュージーランド)<br>クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学 |
| 28 | (韓国) 国立公州大学校                       |
| 29 | (中国) 東華大学                          |
| 30 | (フランス) オーベルニュ大学<br>(クレルモン第 1 大学)   |
| 31 | (オーストラリア) ディーキン大学                  |
| 32 | (中国) 大連大学                          |
| 33 | (中国) 北京大学外国語学院                     |
| 34 | (タイ) チェンマイラチャバット大学                 |
| 35 | (イギリス) チェスターカレッジ *H25 年新規          |
| 36 | (台湾) 国立高雄餐旅大学 *H25 年新規             |
| 37 | (イギリス) レスター大学 *H25 年新規             |
| 38 | (アイルランド) リムリック大学 *H25 年新規          |
| 39 | (オーストラリア) アデレード大学 *H25 年新規         |

### (参考)

現在、英語圏中心に協定校拡大を推進しており、平成 26 年 6 月時点でノースアリゾナ大学(アメリカ)・サンシャインコースト大学(オーストラリア)・ルイスアンドクラーク大学(アメリカ)の 3 校と協定を締結。さらに数校と調印に向けて調整中である。

|     |                                                                                                                            |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 訪問先 | Columbia University, The State University of New York, City University of New York,<br>NAFSA Annual Conference (St. Louis) |
| 訪問者 | Paul Snowden 副学長<br>国際交流課 川尻明香 課員                                                                                          |

### 目 的

NAFSA 年次大会は年に 1 度開催される、国際教育や留学に関連する会議や研修などを行う、世界各国から教育機関が集まる会である。グローバル人材育成推進事業の一環として、本学の協定校拡充(欧米圏)を目的とし、NAFSA に参加している各国の大学関係者と情報交換を行う。また、NAFSA への出張と合わせてスノーデン副学長の知人がいるニューヨーク市立大学、ニューヨーク州立大学及びコロンビア大学への訪問も行うため。

### 行 程

5 月 25 日(土)

ニューヨーク市内 3 大学関係者と面会・意見交換  
(NY 州立大学, NY 私立大学, 元 Lewis & Clark College 学長)/Columbia 大学名誉教授

5 月 27 日(月)

NAFSA 年次総会レジストレーション手続き/会場視察/NAFSA 参加大学との意見交換/Knowledge Community の Networking Reception に参加

5 月 28 日(火)

英検協会関係者と打合せ/協定校拡充について意見交換/各大学と打合せ・意見交換 (Bangor University, Dublin City University, University of Limerick, Temple University, Lewis & Clark College, Belmont University, The University of Adelaide, University of Washington) /Study Abroad Foundation Reception に参加。

### 総 括

今回、杏林大学として初めて NAFSA への参加を行った。世界各国から参加する大学関係者との協定の可能性に関する折衝を主な目的として参加した。日本からは国際教養大学と関西外大が個別ブースを出展しており、JAFSA が総括を行っている JAFSA (日本) ブースに 25 大学が出展していた。出展大学(“大学“略): 青山学院、桜美林、大阪学院、関西、関

西学院、北九州市立、近畿、慶応義塾、国際基督教、埼玉、滋賀県立、昭和女子、創価、中央、同志社、東洋、南山、日本、福島、法政、明治、立教、立命館アジア太平洋、立命館、早稲田。出展していたいくつかの大学関係者にブース出展のメリットについて話を聞いたところ、現協定校や新規協定校とのミーティングを目的としたアポの場所を指定しやすく、ミーティングスペースを事前に確保しておけるメリットがあるとのこと。今回本学は各大学のブース、会場内やホテルのロビー等でミーティングを行った。

また、日中は様々なワークショップが行われており、有料ではあるが国際交流関係の事務職員等のスキルアップの為にはとても良い研修であると思う。ワークショップや Expo 以外にも複数の団体や大学がレセプションを行っているため、様々な国や地域の大学関係者との情報交換やネットワーキングが可能である。同じ国際教育という現場で学生や大学の国際化に勤めている教職員同士の交流は仕事に対するモチベーションの向上や自国の大学での国際化などに役立てられるアイディア等を学ぶことができると感じた。

今回打合せを行った大学には本学のグローバル人材育成推進事業への取り組みについて、キャンパス移転に合わせて外国語学部 2 年次の 1 学期留学というアカデミックプランについて話し合うことができた。多くの大学はとても好意的であり、この新たなアカデミックプランに賛同し、2017 年までの準備期間のパイロットプランに協力したいと申し出てくれた大学もある。今後は、実際の協定に向けた大学間のやり取りが重要である。



|     |                                |
|-----|--------------------------------|
| 訪問先 | 広東外語外貿大学（中国・広東省）               |
| 訪問者 | 外国語学部 塚本 尋 教授<br>国際交流課 伊藤理恵 主任 |

### 目 的

今回の訪問は、従来の交流に加えて、さらに交流の幅を広げ深めるために率直な意見交換をすることにある。

①「グローバル人材育成推進事業」について説明し、今回の採択に当たっては、訪問先大学との交流実績が高く評価された点など、今までの協力に対する謝意を表する。

②訪問先大学の担当教員、職員と直接、互いの留学生の状況を(現状では杏林生はまだ派遣していない)把握しあい、学習面・生活面での便宜を図って、よりよい教育を進める環境整備に資する。

③次期来日留学予定の学生と面談し、日本語のレベルや個性を理解する。派遣側の要望も聴取する。

④杏林生を受け入れる予定の部門の教員・職員と会談し、問題点などを聴取する。

⑤留学生の宿舎見学を含めて、留学生活の状況を具体的に聴取する。

⑥教学面での今後の交流の可能性について意見交換する。

⑦シンポジウムの開催や招聘の予定、その他、今後の可能性について意見交換する。



### 行 程

5 月 30 日(木)

広東外語外貿大学訪問/日本語学部教員との交流拡大についての意見交換

5 月 31 日(金)

広東外語外貿大学留学生教育学院訪問/本学学生の派遣に向けての確認/塚本教授による特別講義/留学生対象の授業見学/学生の発表見学/留学予定の学生との面談

6 月 1 日(土)

広東外語外貿大学寮・食堂・図書館などの学内視察/派遣時生活圏内の確認

### 総 括

広東外語外貿大学とは、2010 年 11 月に協定を締結し、松田理事長、塚本国際交流センター長の訪問ののち、2011 年 10 月には先方からの表敬訪問、さらに同年 12 月には松田理事長への名誉教授称号授与、2012 年には本学の塚本慶一教授の訪問講演を招請するなど、先方が本学との交流を従来より極めて重視していることから、非常に良好な関係を築いている。日本語学科教員、国際交流処、留学生教育学院関係者のいずれも両校の交流には、たいへん積極的である。先方からは、すでにのべ 8 人を受け入れており、今後も MTI 大学院生の夏期研修団の派遣や学部編入生の派遣希望がある。

本学学生の派遣先として、学内設備、市内生活圏を視察したが、空港からも近く、地下鉄の利用も便利、学内だけでも十分生活ができる環境である。授業風景も確認したが、初級の学生にもきめ細かな指導がされており、本学学生を安心して派遣することができると感じた。英語教育も盛んな大学であるため、グローバル人材育成推進事業の目的である日中英トライリンガルの育成にも十分対応可能な今後の交流発展が大いに期待できる大学である。



|     |                                           |
|-----|-------------------------------------------|
| 訪問先 | 大連外国語大学<br>大連大学                           |
| 訪問者 | 外国語学部／国際交流センター長 塚本慶一 教授<br>国際交流課 岩本久美子 係長 |

### 目 的

グローバル人材育成推進を目的にこれまでの交流にとどまらず、より幅広い交流の可能性について意見交換を行うとともに、本学学生の留学派遣先として学習面、生活面の環境が整っているかについても確認する。

大連大学については、2012 年に協定を締結したばかりである。今後の学生交流をはじめ、教員交流、教材の共同開発など、今後どのような方面で交流が可能かについて検討をする予定である。

大連外国語大学とは協定締結後、大学指導部の相互訪問、本学教員による集中講義、交換留学生・派遣留学生の相互派遣ならびに受入を順調に行ってきた。今後は、従来の交流に加え、より交流の実を上げるため、学生の交流に更に力を入れるほか、教職員の交流や教材の共同開発などを含めた幅広い交流が望まれるため、関係者と率直な意見交換をする。

### 行 程

6 月 23 日(日)

大連大学副学長・日本語文化学部副学部長と会談/両校の国際交流についての検討/交換留学について/学部編転入学・大学院への受入れについて/教職員の相互派遣について

6 月 24 日(月)

大連外国語大学訪問/日本語学部との会談/両校の国際交流についての検討/交換留学について/学部編転入学について/短期研修の相互派遣について/教職員の相互派遣について/特別講演/漢学院(語学センター)訪問/学内施設見学

6 月 25 日(火)

大連外国語大学訪問/留学を控えた学生との面談/在瀋陽日本国総領事館在大連出張所所長との面談

### 総 括

2013 年 7 月現在で中国における協定校は 18 校(香港、台湾を含む)まで拡大することができた。北京大学

外国語学部、北京語言大学、北京外国語大学、北京第二外国語大学、上海外国語大学、広東外語外貿大学などいずれも名門校といわれる大学と協定を締結し、中国各地に協定校を持つことができたことで学生の留学派遣先としての選択肢を広げることができた。今回訪問した大連外国語大学は中国東北地方での本学の拠点としたい意向があり、学生の派遣先として安全性、学校の学修環境、現地学生の質などすべてにおいて学生を派遣するのに心配のない大学だと感じた。今後、学生の派遣先の一つとして手配を進めていきたい。さらに、学生の交流にとどまらず教職員の交流、教材の共同開発等でも協力を得ることができると確認できたことは収穫であったと感じる。また、本学での通訳翻訳コースについて強い関心を持ってもらっており、今までどおりの学部生の受入れに加え、大学院生の受入れについても強い要望があった。

今回訪問した、大連大学、大連外国語大学ともに本学の国際交流事業に対し、積極的な協力を得られると感じた。これまでの交流をさらに発展させることでよりよい効果が上がると期待できる。





|     |                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 訪問先 | Queensland University of Technology, ICTE-UQ(The University of Queensland),<br>University of the Sunshine Coast, The University of Adelaide, University of South Australia,<br>Deakin University, University of Wollongong, The University of Newcastle |
| 訪問者 | Paul Snowden 副学長<br>総合政策学部 Malcolm Field 教授<br>外国語学部 倉林 秀男 准教授                                                                                                                                                                                          |

## 目 的

グローバル人材育成推進事業の一環として、本学の協定校拡充および既に協定やプログラムを実施している大学への訪問と、海外留学・研修先開拓を目的とし 4 都市 8 大学の関係者と情報交換を行う。

## 行 程

8 月 15 日(木)

Queensland University of Technology (QUT) 訪問/  
杏林大学の今後のあり方と留学制度の説明/学生受  
入れ可否の意見交換/キャンパス見学

QUT Business school スタッフとの打ち合せ/ スク  
ールの説明と大学間交流について協議

QUT International College 訪問/カレッジの説明と意  
見交換/Faculty of Health スタッフとの打ち合わせ/ 学  
科と授業の概要説明

8 月 16 日(金)

ICTE-UQ(クイーンズランド大学附属語学学校)訪問/  
両大学のプログラム説明/ICTE-UQ 責任者と面会/英  
語授業の概要説明

University of the Sunshine Coast 訪問/概要説明

8 月 19 日(月)

The University of Adelaide 訪問/概要説明と意見交  
換/キャンパス見学/ランチミーティング

University of South Australia 訪問/協定締結への具  
体的な話し合い/両大学の概要説明/キャンパス見学

8 月 20 日(火)

Deakin University 訪問/杏林大学の今後の計画を説  
明/長期プログラムについて意見交換/キャンパス見学

8 月 21 日(水)

University of Wollongong 訪問/杏林大学の今後の計  
画を説明/協定の見直しの確認

8 月 22 日(木)

The University of Newcastle 訪問/打合せ杏林大学  
の今後の計画を説明/教員から語学教育と教育・人文  
学部の説明/履修可能科目について意見交換

## 総 括

本出張では、既に杏林大学と協定や繋がりがある  
大学、そしてフィールド教授を通じ、今後の協定を前  
提にした新規の大学への訪問及び視察を行った。各  
大学での話し合いの中で重要な点は、本学のグロー  
バル人材育成推進事業への取り組みの一環として、カ  
リキュラムの見直し等を行い、平成 26 年 4 月のキャン  
パス移転に合わせて外国語学部のカリキュラムの改編  
を行うという点である。平成 28 年 4 月からの入学者を  
対象に、全学生が 2 年次 2 学期に 1 学期間の留学を  
行うという新たなアカデミックプランに向けて、その受入  
れ先となる協定校の拡充および平成 29 年までの準備  
期間にパイロットプランとして数名の学生の受入れを  
実施してくれる大学の選定を行う事が急務であり、協  
定締結に向けた事務レベルでの交渉を積極的に行な  
う必要がある。

オーストラリアでは学年が 2 月に始まり、後期は 7 月  
下旬から始まるのが一般なので、杏林大学から派遣す  
る時期について議論をしなければならない。丸 1 年留  
学のオプションも考えられる。

今回訪問した多くの大学は、人文系の学部以外に  
看護、医学系の学部も有する大学もあった。そうした  
大学からは本学の保健、医学系との提携の可能性に  
ついての提案もあった。そしてこの訪問を通じて、本学  
のカリキュラムが総合後大学として海外の大学から高く  
評価されていることも強く認識することができた。オー  
ストラリア国内の研究重点大学との協定を締結すること  
で、本学の学生にとって有益になるだけではなく、教  
職員の研究・教育力にも大きな利益をもたらすことが  
できると考えられる。



|     |                                                                                                           |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 訪問先 | QQ English 社<br>University of Visaya, Cebu Technological University, University of San Carlos (フィリピン セブ島) |
| 訪問者 | Paul Snowden 副学長<br>総合政策学部 久野新 講師                                                                         |

## 目 的

明治大学 文明とマネジメント研究所が主催する「異文化理解プログラム(Cross-Cultural Distance Learning、以下 CCDL)」に日本とフィリピンの大学が共同で実施する英語による遠隔講義型の「異文化理解講座」実施に向けて、セブ島で行われる事前研修会(フィリピンの大学訪問およびプログラム内容に関する打合せ)への参加のため。

## 行 程

9 月 1 日(日) セブ島(フィリピン)到着

9 月 2 日(月)

QQEnglish 社訪問・藤岡社長と面会/会社の概要・戦略説明/授業視察

日本領事館訪問/在フィリピン日本国大使館セブ領事部大竹領事と面会/会食/日本の大学の英語教育の在り方について意見交換

Cebu Technological University 訪問/学長・教育学部学部長と面会/CCDL について概要と計画の説明

9 月 3 日(火)

同社オフィス内にて University of Visaya 訪問/ ビデオ会議にて副学長・教員らと会議/遠隔授業や国際交流の取り組みについて説明/University of San Carlos 訪問/副学長と教員 2 名と面会/概要説明/意見交換

## 総 括

杏林大学では、2016 年入学者より全員留学を予定しているところであるが、通常の英語の授業に加えて、フィリピン人教員とマンツーマンのオンライン・レッスンを補完的かつ安価に活用することで、留学前に必要な英語力を短期間で修得することを目指すことが可能となる。

今後の協力の可能性を模索するための第一段階として、杏林大学の教職員および学生数名に対して、トライアル用の無料サービスを提供して頂けないか交渉したところ、快諾を頂いた。オンライン・サービスに加えて、同社が提供する短期留学制度についても、コスト

パフォーマンスが高いことから、希望する学生に紹介を行う、といった方法も検討に値する。同時に、移転後の新学部においては、日本人学生および留学生向けに英語の授業を積極的に提供することが目指されていることから、学生のみならず、FD・SD の一環として教職員の語学力を向上させることも、大学としての品質を維持向上させるうえで不可欠な取り組みとなる。こうした局面においても、フィリピン人教員とのオンラインの英会話レッスンや現地での研修を学内人材に提供することは検討に値する。

セブ島内 3 つの大学では、いずれも日本の大学との間で CCDL を実験的に開始することについて合意を得ることが出来た。前述のとおり、CCDL は、オンラインにより両国の大学をむすび、両国の教員・学生がオンライン上で合同学習や意見交換・討論を行うものである。こうした取り組みは、杏林大学の学生の国際性や異文化への理解を育むことに資すると考える。

今回の出張において、各大学の面会者と非公式な立ち話しを通じて、いずれの大学も短期・長期の日本人留学生受け入れや交換留学の実施について前向きであり、必要に応じてメールを通じて今後連絡を取り合うことについても同意を得た。

アカデミックな意味におけるセブ島の大学のランキングは、欧米の大学に比べると見劣りするものの、全外国語学部 2 年次の 1 学期留学というアカデミックプランを実現させるという目標を掲げるうえで、フィリピンにおけるいくつかの大学を選択することについては検討に値すると感じた。とりわけ、今後更に円安が進展し、欧米およびオセアニア諸国への留学コストが高騰するリスクが否定できないこと、および、成長著しく、日本との経済的相互依存も深化しているアジアの国において日本の若者が学ぶことの意義は大きいと考えられることから、英語を公用語とし、物価も安いフィリピンの大学を留学先の選択肢として入れておくことについては前向きに検討すべきであろう。無論、フィリピンにはセブ島以外にもマニラを中心に優良大学が存在しているため、今回訪問した大学に限定することなく、様々な可能性を模索すべきである。

|     |                                                                               |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------|
| 訪問先 | Oregon State University, Lewis & Clark College,<br>Portland State University, |
| 訪問者 | 外国語学部 北村 一真 講師<br>総合政策学部 北島 勉 教授<br>三浦 秀之 講師                                  |

### 目 的

海外における新たな留学・研修先の開拓及び協定校の拡大を目指し、米国オレゴン州立大学、ポートランド州立大学、ルイス&クラークカレッジにて学生及び教職員の交流に関する情報収集を行う。

### 行 程

2 月 11 日 (火)

Oregon State University (OSU) を訪問/言語・文化・社会学科の教員らと面会/交換プログラムの概要説明/学生の交換留学及び教員の交流に関する意見交換/プログラムの提案

Center of Global Health (CGH) 訪問/健康課題について共同研究・連携の提案/同年 6 月実施のシンポジウムの参加要請

OSU の海外研修・留学、国際化の業務を扱う International Program の教職員らと面会/プログラムの概要・現状・新規取組などの情報収集/

留学生のリクルートや入学後の支援を行う INTO OSU の担当者らと面会/本学が利用可能なプログラムの情報収集

2 月 12 日 (水)

Lewis & Clark College (以下 LCC) を訪問/概要説明/学生のレベルに見合った教育提供について座談/キャンパス・授業見学/ランチ会

Portland State University (以下 PSU) を訪問/各分野の教職員らと面会/語学研修やインテンシブプログラムの説明と利用可能な情報収集/キャンパス視察・学生生活のサポート体制確認/夕方食事にて会食

2 月 13 日 (木)

連絡・調整

2 月 14 日 (金)

University of  
Oregon を訪問/



国際交流の責任者と名刺交換/国際交流等に関する情報収集/キャンパス見学



### 総 括

本米国オレゴン出張では、本学のグローバル人材育成推進事業として進める学生の留学先、教職員の研修機会の拡充の場としての可能性を探った。

加えて訪問先へのアクセス、治安や生活環境の視察も行ったが、大きく懸念する要素は挙げられなかった。

OSU は農村地域にありキャンパスによって街が形成され、LCC はポートランド市郊外に位置する落ち着いた雰囲気のカンパスであり、PSU はポートランド市内にある都市型キャンパスと、訪問した 3 校ともそれぞれ学習環境が若干異なるが、いずれも留学生の受け入れには積極的であり、留学生向けの英語のプログラムも充実していた。本学との国際交流についても積極的であった。

これらの 3 校との国際交流については、短期研修、短期交換研修、長期派遣留学、長期交換留学、教員の交換という形態が考えられる。

特に長期派遣留学については、積極的な受け入れ姿勢を示していた。OSU については、本学に現在夏季休暇中に米国派遣するプログラムが無い場合、本学の学生を対象としたプログラムの候補として検討しても良いかと思われる。短期交換研修と長期交換留学については、本学の学生寮の確保や英語で提供できる講義数を増やすといった準備が必要である。また、教員の交換については、仕組みを整えることが必要であるが、本学の教員にとっても先方の大学で講義や研究をすることで、帰国後に本学の国際化に貢献できることと思われる。

## ○海外交流の動き

4月

### クイーンズランド大学関係者来訪

4月19日 オーストラリアクイーンズランド大学付属生涯教育・外国語教育機関の責任者が来校した。本学とは5年間に渡り交流を続けており、昨年度本学のプログラムが文部科学省のグローバル人材育成推進事業に採択されて以来、協力関係の強化に努めている。今回の会談では、ポール スノードン副学長、赤井孝雄外国語学部長、マルコム フィールド総合政策学部教授、倉林秀男外国語学部准教授と活発な意見交換を行った。副学長が、本学の学生にとって有益なプログラムの提供を求めたところ、インターンシッププログラムや、英語で経済やマーケティングを学ぶプログラム、英語インテンシブプログラムなど学生の興味、関心に応じて個別的に対応をしてくれるという回答があった。



本学ではグローバル化を強く推進していく中で、海外留学の経験が学生にとって大きな意味を持つという認識のもと、これまで以上に成果の上がる海外留学プログラムを各国の大学と個別に交渉し、一人でも多くの学生に提供していく。

5月

### ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジから訪問

5月28日に外国語学部及び総合政策学部において、ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ(University of Hawai‘i Kapi‘olani Community College) (以下KCC)の教務責任者が本学を訪問した。



杏林大学では昨年度のグローバル人材育成推進事業の採択を受け、外国語学部を中心に大学全体の国際化を進めている。

その一環として、海外の大学との連携を強化するための働きかけも活発に行っており、KCC とも関係構築を目指す教育拠点の一つとして今春より交流を図ってきた。今回の面会では、両校の情報交換に加え、学生のセメスター留学の可能性等についても議論を重ね、今後の方向性について有益な指針を得ることができた。これからもハワイ大学 KCC との互恵的関係の構築に向け、さらなる熟議を重ねていきたいと考えている。

7月

### クライストチャーチポリテクニク工科大学の教員が来訪

7月2日、2010年に本学と交流協定を締結したクライストチャーチポリテクニク工科大学(CPIT)において、International Training Programs のマネージャー及び日本語科で翻訳の授業なども担当している教員が7月2日、本学を訪問した。CPITは本学でも人気の高い留学先の一つで、平成25年度も8月より1名(1年の交換留学生)、9月より5名の学生(3カ月～6カ月)が留学した。



また、平成 25 年度より日本語教育実習インターンシップもスタートし、3 名の学生が 2 週間、CPIT の日本語科で日本語クラスの補助をするなど、様々な形で交流が行われている。ポール スノードン副学長、赤井孝雄外国語学部長、倉林秀男准教授を交えた会談でも、本学でグローバル化を強く推進していく中、益々、関係を強化していくことを話し合った。



会談後は、CPIT から本学へ交換留学をしている留学生と共に、英語クラスの見学や、留学や日本語教育インターンシップのために CPIT へ行く学生との懇談が行われ、これから CPIT へ行く学生にとっても大変有意義な時間となった。

9月

#### 台湾国立高雄餐旅大学の潘副学長が松田理事長と跡見学長を訪問

学術交流協定締結を検討している台湾国立高雄餐旅大学の潘江東副学長と施文華応用日本語学科長が 9 月 4 日、三鷹キャンパスの松田博青理事長と跡見裕学長を訪問した。

塚本慶一国際交流センター長も同席した懇談会は、終始和やかな雰囲気で行われ、学術交流協定を機に、教育・研究等さまざまな分野で両校の特色を生かした交流が進められることが大いに期待できるものとなった。

高雄餐旅大学へは今年 3 月にグローバル人材育成推進事業における協定校の拡大を目的に教員 2 名、職員 1 名が訪問し、学生や教職員の交流を含め、どのような交流・協力ができるかを検討してきた。今回は学術交流協定締結の最終的な打ち合わせも含めて潘副学長と施学科長の訪問となった。



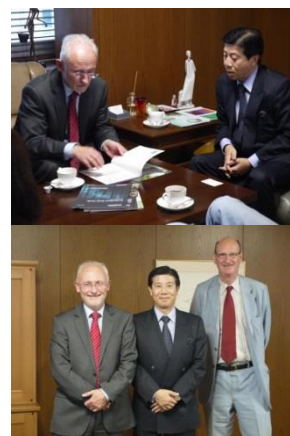
高雄餐旅大学は 1995 年に設立され、観光系に特化した 11 の学科を設置している大学であることは、その名称からも明らかである。そのため本学外国語学部観光交流文化学科との交流が期待されている。今回の訪問では、学生交流にとどまらず教員交流、教材の共同研究など幅広い分野での協力について今後具体的に検討して、学術交流協定締結に向け進めていくことを確認した。

10月

#### イギリス レスター大学の Douglas Tallack 副学長が松田副理事長とポール スノードン副学長を訪問

学術交流協定締結を予定しているイギリスのレスター(Leicester)大学の副学長が 10 月 4 日、三鷹キャンパスの松田副理事長とポール スノードン副学長を訪問した。懇談会は穏やかな雰囲気で行われ、学術交流協定を基に教育・研究等さまざまな交流が進められることが話し合われ、協定締結に向けて大変有意義なものとなった。

レスター大学へは今年 3 月にグローバル人材育成推進事業における協定校の拡大を目的に教員 2 名、職員 1 名が訪問し、キャンパス見学を行い、どのような学術交流や協力ができるかを検討してきた。今回はその最終的な打合せも含めた訪問となった。協定が結ばれたら、杏林大学の学生がレスターに留学できるようになる。





12月

### 本学と台湾国立高雄餐旅大学が学術交流協定を締結

杏林大学と台湾の国立高雄餐旅大学は平成 25 年 12 月 2 日付けで、両大学の友好協力を促進するため、学術交流協定を締結した。



両大学の学術交流内容は、以下のとおりである。

- ・専任教員及び研究者の相互受け入れ並びに便宜供与
- ・学部学生の相互受け入れ並びに便宜供与
- ・学術情報・学術資料の交換
- ・共同研究・会議・教育活動の推進

国立高雄餐旅大学は、ホスピタリティ業界(ホテル、レストラン、旅行代理店、航空会社など)において高いスキルと外国語の応用力を兼ね備え、即戦力として活躍できる人材を養成することを目的として 1995 年 12 月に設立されたこの分野での唯一の国立大学である。

### オックスフォード留学・研修実施校 CIE からの来訪および事前学習会の実施

12 月 6 日に、イギリスのオックスフォード留学・研修の実施教育機関である CIE (College of International Education, Oxford)から副校長が来校され、留学・研修プログラムについての打ち合わせを行った。外国語学部英語学科では 23 年間に渡りオックスフォードでの語学研修を実施している。また中長期留学(インテンシブプログラム)については今年度で 2 回目の実施となる。

また、CIE の副校長による英語でのオックスフォード研修(2014 年 2 月～3 月実施)事前学習会が開催された。研修参加予定学生に加え、留学に関心のある 1 年生および 2012 年度インテンシブプログラム参加学生、計 21 名が参加した。



オックスフォードの重層な歴史を紹介する講義を通し、学生達はイギリスの文化に触れると共に留学をより身近に感じる機会となった。

1月

### 本学とレスター大学(イギリス)が学術交流協定を締結

杏林大学とイギリスのレスター大学は平成 26 年 1 月 24 日付けで、両大学の友好協力を促進するため、学術交流協定を締結した。両大学の学術交流内容は、以下のとおりである。

- ・共同教育プログラムおよび研究に関する開発
- ・教職員および学生の交換
- ・情報、教材、出版物の交換
- ・学位取得やその他授業の履修を目的とした学生の入学
- ・その他、双方が認める事項

レスター大学は、1921 年に創立された英国で最も古い伝統を誇る国立大学のひとつであり、104 か国から集まった約 18,000 人の学生(留学生は 16%)が約 40 学部・大学院で学んでいる。

2月

#### 本学とリムリック大学(アイルランド)が学術交流協定を締結

杏林大学とアイルランドのリムリック大学は平成 26 年 2 月 11 日付けで、両大学の友好協力を促進するため、学術交流協定を締結した。両大学の学術交流内容は、以下のとおりである。

- ・学位取得や語学プログラムを含むその他のコースへの学生の受入れ
- ・教職員および学生の交換
- ・情報、教材、出版物の交換
- ・共同教育企画、研究活動およびシンポジウム
- ・教職員教育、品質保証

リムリック大学は、1972 年に創立されたアイルランドでは数少ない日本語学科がある大学である。キャンパスは西海岸のシャノン川沿いにあり緑も多く、ここには外国人留学生が 2,623 名学んでおり、複数の学部から柔軟に授業を履修できる機会が提供されている。



## ○学生の海外留学促進・支援

在学生の海外留学の活性化を目指し、留学プログラムの一層の充実化を図ると共に、学生の動機づけの促進や、留学中のサポート、帰国後の報告会などを通して留学支援体制の強化を図った。

### 1. 留学・海外研修派遣実績

留学プログラムの多様化を図り、今年度は新たな学生の留学先として2校が加わった。

- ・クイーンズランド大学 4か月留学(オーストラリア)
- ・チェンマイラジャパット大学 4か月留学(タイ)

新たな留学先や提携校、さらに私費留学生も含め、3か月以上の留学参加者は、74名であった。

同時に海外研修も積極的に拡充した。日本語や日本文化を海外へ発信する SEND プログラムの一環として行われたクライストチャーチポリテクニク工科大学日本語インターンシップ(ニュージーランド)では、現地日本語クラスのアシスタントや日本語を学ぶ学生との交流、日本の食文化のプレゼンテーションの実施等、充実した成果を上げることができた。

医学部のクリニカルクラークシップも含め、13プログラム、76名が参加した。

留学・海外研修参加学生数

|      | 平成23年度 | 平成24年度 | 平成25年度 |
|------|--------|--------|--------|
| 留学   | 44     | 50     | 74     |
| 海外研修 | 76     | 54     | 76     |
| 合計   | 120    | 104    | 150    |

## 平成25年度 留学実績

| 留学先                 | 国・地域     | 実施日程                            | 期間      | 人数 |
|---------------------|----------|---------------------------------|---------|----|
| カリフォルニア大学アーバイン校     | アメリカ     | 2013.9.30～2014.3.23             | 6ヶ月     | 7  |
| オックスフォードインテンシブプログラム | イギリス     | 2013.9.19～12.23                 | 3ヶ月     | 4  |
| チチェスターカレッジ          | イギリス     | 2013.9.1～12.23                  | 3ヶ月     | 7  |
|                     |          | 2013.9.1～2014.2.17              | 5ヶ月     | 16 |
| ウーロンゴン大学            | オーストラリア  | 2013.4～2013.12                  | 9ヶ月     | 2  |
| クイーンズランド大学          | オーストラリア  | 2013.8.24～12.16                 | 4ヶ月     | 2  |
| ディーキン大学             | オーストラリア  | 2013.9～2014.2                   | 5ヶ月     | 2  |
| クライストチャーチポリテクニク工科大学 | ニュージーランド | 2013.8～2014.7                   | 11ヶ月    | 1  |
|                     |          | 2013.9.14～12.15                 | 3ヶ月     | 4  |
|                     |          | 2013.9.14～2014.3.2              | 6ヶ月     | 1  |
| ビクトリア大学             | カナダ      | 2013.4.6～2013.7.8               | 3ヶ月     | 4  |
|                     |          | 2013.4.6～2013.8.18              | 4ヶ月     | 2  |
| トロント大学              | カナダ      | 2013.9.29～2014.2.10             | 5ヶ月     | 5  |
| チェンマイラジャパット大学       | タイ       | 2013.8～2013.12                  | 4ヶ月     | 2  |
| 政治大学                | 台湾       | 2013.9～2014.8                   | 12ヶ月    | 1  |
| 北京外国語大学             | 中国       | 2013.9～2014.7                   | 11ヶ月    | 1  |
| 上海外国語大学             | 中国       | 2014.2～2014.7                   | 5ヶ月     | 4  |
| 北京第二外国語学院           | 中国       | 2013.9～2014.1                   | 5ヶ月     | 2  |
| 北京語言大学              | 中国       | 2013.9～2014.1                   | 5ヶ月     | 1  |
|                     |          | 2014.2～2015.1                   | 11ヶ月    | 1  |
| 河北大学                | 中国       | 2013.9～2014.1+2014.2～2014.7(延長) | 5ヶ月+5ヶ月 | 1  |
| 北京大学(私費留学)          | 中国       | 2013.8～2014.1                   | 5ヶ月     | 1  |
| 北京外国語大学(私費留学)       | 中国       | 2014.2～2015.1                   | 11ヶ月    | 1  |
| 北京第二外国語学院(私費留学)     | 中国       | 2014.2～2015.1                   | 11ヶ月    | 1  |
| セントラサル大学(私費留学)      | フィリピン    | 2014.3～2014.8                   | 5ヶ月     | 1  |
|                     |          |                                 |         | 74 |

## 平成25年度 海外研修実績

| 研修先                                                  | 国・地域     | 実施日程           | 期間   | 人数 |
|------------------------------------------------------|----------|----------------|------|----|
| シンシナティー大学看護研修                                        | アメリカ     | 2013.9.1～9.15  | 15日間 | 2  |
| ロサンゼルス研修                                             | アメリカ     | 2014.3.2～3.17  | 16日間 | 21 |
| シンシナティー大学医学部病院実習                                     | アメリカ     | 2013.4.1～4.26  | 26日間 | 2  |
| North Shore University Health System(医)              | アメリカ     | 2013.4.1～4.26  | 26日間 | 4  |
| North Shore University Health System(医)              | アメリカ     | 2013.5.7～5.31  | 25日間 | 4  |
| オックスフォード研修                                           | イギリス     | 2014.2.27～3.16 | 18日間 | 5  |
| ニューカッスル大学研修                                          | オーストラリア  | 2013.8.3～8.26  | 24日間 | 2  |
| バンクーバー研修                                             | カナダ      | 2013.9.2～9.15  | 14日間 | 9  |
| McKenzie Health Center Scarborough Grace Hospital(医) | カナダ      | 2013.4.1～4.26  | 26日間 | 2  |
| 南台科技大学                                               | 台湾       | 2013.8.11～8.24 | 14日間 | 1  |
| クライストチャーチポリテクニク工科大学日本語インターンシップ                       | ニュージーランド | 2013.8.24～9.8  | 16日間 | 3  |
| マレーシアインターンシップ                                        | マレーシア    | 2013.8.17～9.8  | 23日間 | 3  |
| 韓国実習                                                 | 韓国       | 2013.9.9～9.12  | 4日間  | 12 |
| 北京語言大学漢語研修 夏季                                        | 中国       | 2013.8.4～8.29  | 26日間 | 6  |
|                                                      |          |                |      | 76 |

## 2. 留学報告書

### 日本語インターンシップ体験記(ニュージーランド)

外国語学部 英語学科 上村 ひかる

日本語教育インターンシップとして 2013 年 8 月 24 日から 9 月 8 日までニュージーランドクライストチャーチ・ポリテクニク工科大学(CPIT)に日本語教師のアシスタントとして研修に行きました。CPIT の日本語学科は certificate、degree 1、2、3 年生まであり、日本語教師 4 名で教えていました。1 時間 50 分授業で文法を教える授業や、翻訳の授業、日本文化を知る授業、漢字の授業などがありました。私が特に驚いたのは翻訳の授業です。

道案内や日本の文化を伝える例文があり、それを英語を話せない日本人役の人、日本語を話せない外国人役の人、通訳する人に分かれ通訳するのですが、生徒のすらすら出てくる日本語がとても自然で分かりやすく、完璧に翻訳できていました。今まで見たことがない授業でしたが、実践的な能力が身につく素晴らしい授業だと思いました。CPIT では日本語を日本語で教える直接法ではなく、英語で日本語を教えていたので先生に聞くと「将来の仕事(翻訳や通訳)



のために、日本語と英語の関わりが大切だ。日本語が話せるというバイリンガルでも完璧に通訳ができるというわけではない。将来を考えて英語でしっかりと理解させ、その繋がりも大切にさせていくよう取り組んでいる。」という回答を受けました。将来のことも考えて教えている授業を目にし、英語と日本語の重要性を改めて感じました。生徒たちと日本語を使って会話することも本当に楽しかったです。習いたての表現で質問してみたり、人気の歌やアニメなどについても話したりすることができ、みんな日本が好きなのだと言っていて日本人として本当に嬉しかったです。

この研修で得たものはとても大きいです。日本語を教える難しさややりがいを感じたり、生徒がどうしてその間違いをしてしまったのかを考えたりすることで自分自身の日本語力を振り返ることができました。普段日本語を話している私たちが文法を改めて振り返るとなるほど、と思うことができ、また漢字の音読み訓読みをそうなのだと思う機会が多々ありました。日本語が話せるだけでは不十分で学習し説明できることが日本語教師には重要になるのだと肌で感じることができました。

### オックスフォードインテンシブプログラム留学体験記(イギリス)

外国語学部 英語学科 市川 絵梨香

I went to the College of International Education (CIE) in Oxford UK for three months to study English. CIE is located in the city center of Oxford and it is a small school but there are many foreign students and nice



teachers. In the morning class we used textbooks to study English grammar, vocabulary, pronunciation and listening. Each teacher taught differently but in a fun way so it was not difficult to learn new things. In the afternoon class we applied the morning lessons so each afternoon was different. We learned about England and Oxford, including philosophy, architecture, art and entertainment. To assist the learning process, we created quizzes and had the other CIE students take them. As part of the program we conducted a charity event for World Wildlife Fund (WWF), earning over 95 pounds, to save endangered animals.

We celebrated seasonal events and students' birthdays as part of the classes. This gave us opportunities to practice our English skills. These seasonal events included a Halloween party, Tea party, Birthday parties and Christmas party. These parties were good opportunities to talk to other students and we all had a good time.

During the weekends we went to some other parts of England, for example London, Wales, Cardiff and so on. We booked the places where we wanted to go through a tour company and the tour company provided historical lessons on the people and places visited. These tours showed the diversity of the English culture.

I had a really nice host family, the food was delicious and the room was small but comfortable. My host family liked animals so they had two dogs, three cats and two rabbits. I also like animals so it was a paradise for me. The host mother showed me the local places for shopping and how to save money at the same time.

I was there for just three months, but I was able to improve my English and I made lots of friends at CIE. If someone wants to improve their English or just learn about a different culture, joining a study abroad program is a very good way to do it.

### **3. 留学の動機づけや留学を促進するための取り組み**

#### **① 経済的支援**

経済的な留学支援については、学納金減免や奨学金制度の充実(留学先の学納金免除(交換留学)、本学学納金 8 割減免(派遣留学)、JASSO や本学独自の奨学金制度の継続的な拡充)等を行った。

杏林大学海外研修・留学奨学生

(前期受給者)

1 年間留学:2 名 半年間留学:29 名 2～4 週間研修:10 名

(後期受給者)

1 年間留学:1 名 半年間留学:7 名 5～8 週間研修 1 名 2～4 週間研修:31 名

留学生交流支援制度(短期派遣)奨学金 (独行政法人日本学生支援機構) 受給者

交流協定留学型 1 名

短期研修・研究型 19 名

留学中の学費減免制度

平成 25 年度春学期適用:外国語学部 17 名、総合政策学部 1 名

平成 25 年度秋学期適用:外国語学部 54 名、総合政策学部 2 名

#### **② 留学関係冊子の発行**

留学案内誌『Study Abroad』を編集し、留学ガイダンス・個別相談時に随時配布を行い、学生へ留学の全体像を鮮明にすることができた。また、『留学ハンドブック』では、渡航準備から留学中の危機管理等の情報を総合的にまとめ、スムーズな海外生活となるようサポートすることができた。

#### **③ 留学ガイダンス・オリエンテーションの実施**

ガイダンスを通して、留学の説明・動機づけを深めることができた。また、出発前指導や海外危機管理オリ

エンターションを実施し、海外での生活・学業に万全の態勢で取り組める様に指導を行った。また、海外危機管理オリエンテーション(平成 25 年 7 月 31 日、平成 26 年 1 月 23 日)を開催するなど、より安全な留学を目指した支援の拡充も留学促進を後押ししている。

#### **4. サポート体制**

##### **① 留学中のサポート**

短期留学では引率教員が同行し、現地での生活・学業面でのサポートを行い、中長期留学では海外危機管理対策実施団体と連携し、24 時間体制で電話によるフォローが可能な体制を敷いている。また、外国語学部教員による危機管理シミュレーションを実施し、緊急連絡網の構築も行った。

##### **② 海外留学中の学生向けキャリア講座の授業配信**

授業配信システムの導入により、「キャリア指導」関係科目など学内での授業やガイダンス、セミナーの内容が海外(留学先)でも視聴でき、海外留学中の学生が帰国後の就職活動に出遅れないようサポートを行っている。

#### **5. プログラム修了プレゼンテーション**

実施日:平成 26 年 1 月 11 日(土)13 時 15 分～17 時

場 所:D108 教室

評価委員:オーストラリア大使館商務官 ジョージ マネタキス氏

杏林大学 遠藤絢特任教授

司会(英語):坂本ロビン教授 (中国語):宮首弘子准教授

発表学生:38 名(クイーンズランド大学 2 名、ビクトリア大学 6 名、オックスフォードインテンシブプログラム 4 名、ウーロンゴン大学 2 名、クライストチャーチポリテクニク工科大学 4 名/日本語教育実習 3 名、ニューカッスル大学 2 名、チチェスターカレッジ 7 名、マレーシアインターンシップ 2 名、北京語言大学 6 名)

評価委員 2 名の先生を迎え、留学・海外研修帰国者 10 件、38 名の学生のプレゼンテーションを行った。パワーポイントを用い、授業報告、留学経験などを留学先で学んだ言語で発表を行った。

オーストラリア大使館商務官のジョージ マネタキス氏から学生の語学力、プレゼンテーション力の高さを評価され、心に届くプレゼンテーションについてのアドバイスもいただいた。





## ○学生の国際力育成

### 1. グローバルセミナー

#### 第2回グローバルセミナー 『インドで企業』

実施日：平成25年4月25日(木)

講演者：伊藤隆仁氏(SWALLOTIA 代表、杏林大学総合政策学部卒業)

場 所：国際交流プラザ(八王子キャンパス・ガーデン丘2階)

参加者：学生、教職員合計58人

インドのバンガロールで日本企業向けに市場調査等を行う会社を起業し、CEO(最高経営責任者)として活躍中の伊藤隆仁氏による講演と質疑応答で構成され、当初13時までの予定であったが、14時半まで時間を延長してフリートークが行われた。

伊藤氏は、さまざまな人との出会いからインドに行き着いたこと、文化や価値観の違いの中での仕事や生活など実体験にもとづいて話した。講演後は在学生から質問やアドバイスを求める声が多く寄せられた。

「英語はどうしたら上達するか」の問いには、現地の英語学校で学ぶよりインターンシップで多くの人と接することで語学力が飛躍的に上達したという経験を例にして、「必要性があれば覚えられる。そういう状況に飛び込むことも一つの方法」と答えた。「留学すると就職活動に影響が出るので心配」という学生には、「いま、日本の会社は多様性を求めている。1、2年遅れることよりも留学中に多くのことを経験し、実績を積むことが大事で、そこは必ず評価してもらえる」とアドバイスした。

また、海外での仕事に関心がある学生に対しては、留学生や海外に詳しい先生方から話を聞くなど、海外につながる入り口はキャンパスにたくさんあるとした上で、「自信を持って一歩踏み出してほしい、そして挑戦し続けることが大切です」とメッセージを送った。



#### 第3回グローバルセミナー 『草の根からの INNOVATION ～世界を変えるデザイン～』

実施日：平成25年5月28日(火)

講演者：本村拓人氏(株式会社 GRANMA 代表)

Mazalan Kamis 氏(マレーシア・イノベーション財団 CEO)

場所：国際交流プラザ(八王子キャンパス・ガーデン丘2階)

参加者：学生、教職員合計50名

本村氏は、「イノベーション」や「デザイン」とは変革のための壮大な試みばかりではなく、日常生活に密着し、必要なものを作り出すことから始められるとし、その一例として清潔な水を入手できない地域の人へ直接水を飲むことのできる濾過機能のついた「個人用携帯ストロー」の普及事業を紹介した。現在、マレーシアでは国を挙げて草の根からの改革「グラスルーツイノベーション」を支援しており、地域性の高い様々なデザインが生まれているとのことであった。

Mazalan Kamis 氏からは途上国支援を行う日本人へ期待する要素として、「現地のニーズを理解し、文化・地域性を大切にしたい支援を行ってほしい」という言葉があった。それを受け本村氏は、イスラム教徒の農村地域にて住民の声を取り入れた安価な懐中電灯を普及させた事例を紹介し、夜間でもコーランを読めるようになったことで精神的な充足感が増すという“イノベーション”に繋がったと話した。

20代半ばで GRANMA を設立し、現在も年間 300 日に渡り東南アジアで活動をする本村氏に在校生たちに大いに刺激を受けていた。

質疑応答も活発に行われ、学生からの「グローバル人材として求められる要素は？」という問いに「アジアには優秀な人材が沢山いる。皆さんはこれからそうした人達と競うことになるため、勉強でもなんでも、自分の強みを突出するほど磨くことが大切である。また、日本ならではの感性など、独自性を磨くことにも努めてほしい。」と本村氏はメッセージを送っていた。

セミナーに参加した学生達からの感想として「恐れないこと、何でもやること、何かを起こそうとしている人を支援することの大切さ・面白さを知った。」「貧困支援や国際協力への関心が高まった。」等の声が多く上がり、グローバル社会へ視野を広げるきっかけとなると共に、今後の学業への弾みとなった様であった。



#### 第 4 回グローバルセミナー 『総合政策学部学生による英語での社会科学プレゼンテーション』

実施日：平成 25 年 7 月 17 日（水）

場 所：アクティブラーニング教室（八王子キャンパス・D302 教室）

通常、グローバルセミナーは、外部から講師を招聘しているが、今回のセミナーは総合政策学部の学際演習を履修している学生が、これまでの集大成として、英語でのプレゼンテーションをおこなった。「高尾山の魅力について」「占いの秘密」「キラキラネーム」「オリンピックの問題点」と、各グループがそれぞれのテーマを設定し、学生たちは、いかに聞き手に分かりやすく伝えるかを考え、スライドや進行にも工夫を凝らした。

本学のグローバル人材育成推進事業において、スマートでタフな交渉能力を兼ね備えた人材育成を目標として掲げているが、ひとつの問題点について学生自身がリサーチし、自分なりの答えや見解を示すことは、これから社会で活躍するために必要不可欠な能力である。学生たちにとっては、日英両言語で体系だった発表をおこなう難しさと、必要性を知る貴重な機会となった。



#### 第 5 回グローバルセミナー『総合家電メーカーWalton からみる 21 世紀の成長国バングラデシュ』

実施日：平成 25 年 10 月 22 日（火）

講 師：Lokman Hossain Akash 氏（Walton 海外マーケティング責任者）

場 所：ガーデン丘 1 階教職員専用スペース

参加者:学生、教職員合計 57 名

Akash 氏は、まず、Walton 設立から現在までの歩みや事業展開を紹介した。今やバングラデシュを代表する企業となった Walton には、「(できる限り)No と言わない」「創造力をかきたてて仕事をする」などの企業精神があり、また、設立当初から家族経営だったため、「みんなで協力してやっていく」という社風もあると話した。

Walton の特徴・戦略として、「ジャパン・クオリティの獲得」があげられる。低価格にこだわるだけでなく、日本人を雇用したり、日本企業等から技術指導を受けることにより、ジャパン・クオリティ(日本メーカーの品質基準を満たしている標準品)を保証し、世界に進出している。その中で、Akash 氏は「今後、Walton はアフリカ・中東地域に焦点をあててビジネスを展開していく」と話した。「アフリカ・中東などは、バングラデシュと経済状況や発展レベルが似ている。中国やタイがこれまで生産国として注目されてきたが、既に人件費などが随分高くなってきており、それに伴い価格も上昇している。それに比べてバングラデシュは物価も人件費もまだまだ安い。人件費が安くて優秀な人材がいるのだから、更に成長していく可能性がある。世界最貧国と言われているが、それを利用してもっと発展できるだろう」との見解を述べた。

参加者からは、「今後ますます国際的に飛躍していくなかで、競争相手とどのように戦っていくのか」「温暖化への対応は」「なぜ貿易業から製造業に変わっていったのか」「現在の賃金水準を維持できるのか」など様々な質問があり、それに対し真摯に受け答えをする Akash 氏の姿も印象的だった。

Walton というひとつの企業の視点から、世界の動きを感じられる講演となり、参加者からは「バングラデシュと日本のつながり、バングラデシュと世界のつながりを感じられるセミナーだった」「バングラデシュが今後どのように成長していくのか興味を持った」「Akash 氏のように、海外で活躍できるような英語力を身につけたい」などの声があがった。



#### 第 6 回グローバルセミナー(FD)『インターンシップの教育的役割』

日時:平成 25 年 11 月 6 日(水)

講師:Andrew Horvat 氏(元スタンフォード日本センターの所長)

場所:八王子キャンパス E 棟 401 教室、(中継)三鷹キャンパス

参加者:教職員 80 名

セミナーに先立ち、平成 24 年度グローバル人材育成推進事業の成果報告もおこなわれ、跡見学長は、「本学において事業は順調に進捗しているが、達成すべき目標はかなり高い。実現に向けて、事業を推進していく。」と述べ、続いて塚本国際交流課長は、平成 24 年度の取り組みを報告するとともに、「来年度の中間評価に向けてこれまでの成果を可視化していきたい。今後、インターンシップなど、新しい取り組みも増えていくので、より一層の協力を願いたい。」と呼びかけた。

その後のグローバルセミナーでは、講師に Andrew Horvat 氏を迎えて、国際的なインターンシップの重要性についてご講演いただいた。Horvat 氏は、日本を中心に 35 年間ジャーナリストとして活躍され、

近年では教育の分野にも活躍の場を広げ、約 5 年間、スタンフォード日本センターの所長として、同センターを統率されていた。

Horvat 氏は、「一昔前、留学は、その国の文化に魅力を感じた経済的余裕がある層がおこなうものだった。しかし現在はより実践的で、より生活を豊かにするために、あるいは就業機会を向上させるツールとして留学を選ぶ。母国以外で留学だけでなくインターンシップをおこなうことは大変有意である」と話した。

また Horvat 氏は、「例えば、アメリカ人が日本に留学する場合、留学前に日本語を勉強した学生と、日本に来てから日本語を学ぶ学生では、その留学自体の満足度が大きく異なる。」と話した。実際、インターンシップ先からの評価も、留学前から学習していた学生の方が、極めて評価が高く、事前の学習が、その留学の成功に強く影響していることが証明されていると話した。

Horvat 氏は、“海外に居れば言語が身につくというわけではない”という点を強調するとともに、それを学生に伝えるために、peer-to-peer (学生と同世代の友人・先輩など対等な者同士が伝え合うこと) が、効果的であると述べた。

現在、いくつかの日本企業では、海外からのインターンシップを歓迎しており、それにより、日本人社員の「他文化理解力」「問題解決力」を育成・強化したいと考えている。これまでと異なるインターンシップの重要性が唱えられるなかで、大学として何ができるか改めて考える良い機会となった。



## 第 7 回グローバルセミナー 『外国人から見た日本文化』

実施日:平成 25 年 12 月 2 日(月)

講師:紗幸(Sayuki)氏

場所:八王子市学園都市センター(東急スクエア 12 階)

参加者:学生・教職員及び市民の方を含め 65 名

紗幸氏は、自身が来日し、芸者になった経緯、芸者になってからの体験談などを中心に話をした。芸者の道を志し、修業を経て 2007 年にお披露目したが、外国人であるがゆえ、様々な苦労があったそうだ。現在は自身の置き屋を運営しているが、最初は外国人という理由で独立が認められなかった。しかしそんな中でも理解し応援してくれる先輩がたくさんいたので、芸者を続けてこられたと話した。

紗幸氏は、長い歴史を持つ花柳界ではあるが、時代に合ったものを取り入れていかなければならないと述べた。しかし、絶対に残さなければならぬ文化があり、それらはこれから先も変わらない、変えてはいけない、守っていかなければならないものであると力強く語った。また、現在は日本のみならず海外でも活躍しており、今後も国内外にむけて、積極的に芸者文化を発信していきたいと述べた。





質疑応答では、「芸者の体験をすることはできるか」「芸者を呼ぶにはどのくらいの予算が必要か」など、普段あまり触れることのない芸者文化に興味をもった参加者から多くの質問が投げかけられた。

講演終了後のアンケートには、日本の伝統文化に魅かれ、継承している紗幸氏について、「日本人として、外国人の方がこれだけ日本文化に注目してくれていることを嬉しく思った」「講演、演奏、踊り、全てが素晴らしかった」「日本の文化をもっと知りたい、大事にしたい」という声が多く寄せられた。



## 2. 国際交流の集い

国際交流の集いは、学内の国際交流促進を目的に、外国人留学生と日本人学生、教職員が授業以外の場で一堂に会し、交流を深める機会を持ってもらおうと国際交流センターが毎年2回開催している。

○実施日：平成25年6月19日（水）

留学生を含め学生84名、教職員46名、総勢130名が参加し、外国語学部の杜侃琳さん（上海外国語大学派遣留学生）と羅筱鈺さん（天津外国語大学交換留学生）が日本語、中国語、英語の3言語で司会を務めた。

まず、跡見裕学長とポール スノードン副学長が挨拶した後、中国語学科の佐藤誠さんが、自身の北京への留学体験を流暢な中国語で披露し、それを張睿康さん（北京第二外国語学院交換留学生）が日本語に通訳した。続いて、去年イギリスのチチェスターへ4か月間留学をした英語学科の根上千鶴さんが英語で体験談を披露した。

次に、塚本慶一国際交流センター長による挨拶で交流会がスタートした。交流会では、しばし歓談が続いた後、学生による様々な催しが行われた。吹奏楽部により「故郷」など馴染みの曲が演奏され、マジック研究会によるフォーク曲げやトランプマジックの披露などもあり、会場は大きな盛り上がりを見せていた。



終始和やかな雰囲気に包まれ、留学生と日本人学生が打ち解けて会話をしている姿が多く見られた。

○実施日：平成25年10月23日（水）

八王子キャンパスのガーデン丘1階で、本学の留学生、日本人学生、教職員との交流を深める秋の国際交流の集いが開催された。会場はハロウィンの装飾がなされ、様々なコスチュームやハロウィンアイテムに身を包んだ学生たちで埋め尽くされた。

6か国の留学生と日本人学生あわせて106名、教職員31名、総勢137名が参加した。司会は、外国語学部中国語日本語学科のゴディムス ミッシェル ロランドさん、同英語学科の遠藤洋介さんと同中国語学科の山田和伽奈さんによる日本語、中国語、英語の3言語で行われた。



開会の挨拶では、ポール スノードン副学長がアメリカとイギリスのハロウィン文化の違いについて、自身の幼少期の体験談を交えて話した。続いて、国際交流センター長の塚本慶一教授による乾杯にて開会となった。

交流会では、「恋するフォーチュンクッキー」などが吹奏楽団によって演奏され、歓談中の会場は和やかなムードに包まれた。グループ対抗のクイズ大会では杏林大学や八王子にちなんだクイズが出題され、学生および教職員全員で知恵を絞り、大いに盛り上がった。続いて、マジック研究会によるマジックショー、そして最後は当日会場で撮影された写真のスライドショーで締めくくられた。

今回も様々な企画を通じて留学生と日本人学生および教職員が楽しく会話をする場面が多く見られ、交流を深めることのできる会となった。



### **3. シンガポール大使館訪問**

実施日：平成26年2月13日（木）

昨年度に引き続き、グローバル人材育成推進事業の一環として、大使館訪問がおこなわれた。今回は18名の学生及び教職員が参加し、シンガポール大使館にて、鄭遠傑（ゼン ユエンジェ）一等書記官による説明を受けた。まず、鄭一等書記官は、シンガポールに関する気候、教育、民族、宗教、経済等の基本情報及びシンガポールと日本との二国間関係についてお話され、また、多民族国家であるシンガポールの内情、地理を活かした貿易、国家として取り組んでいる観光（サービス業）の成長戦略等についても言及された。



「まだ新しい国であるシンガポールが先進国になった理由は何か」という学生からの質問に対し、鄭一等書記官は、貿易のハブであること、安定した政権による長期的なプランへの取り組み、そして天然資源のないシンガポールが最も力を入れている人材の育成により、飛躍的なスピードで国際競争力や経済力を持つ国となったと述べた。その他、観光、経済、政治など多岐に渡る質問に対し、丁寧に、時にユーモアを交えてお答え頂き、非常に有意義な時間となった。



### **4. 海外教員の招聘**

実施期間：平成25年7月1日（月）～7月13日（土）

中国関連授業履修者の語学力向上と中国理解を深めるため、北京語言大学の文俊准教授を招聘した。文准教授は、日中逐次通訳特論、中国語コミュニケーション、日中翻訳概論、その他複数の授業を本学教員と共同でおこなった。また、中国語概論、時事中国語の授業では、中国語履修者向けに「中国人大学生の語学学習事情について」というテーマでプレゼンテーションをおこない、北京語言大学での語学学習への取り組みや、中国人大学生の現状を紹介した。文准教授のプレゼンテーションを聞いた学生からは、中国への興味がさらに高まり、ぜひ北京語言大学に留学をしたいという声が多くあった。

また中国語サロンにおいても本学教員とともに学生への指導を行い、好評を得た。

文准教授からは、本学の充実した日中通訳翻訳教育内容ならびに本事業により完備された中日同時通訳設備、中国語サロン等の教育環境に対し高い評価を頂くとともに今後の両校の交流促進への強い希望があった。



## 5. 海外大学との交流

### オックスフォード留学・研修先 学校教員との懇親会

実施日：平成25年5月7日（火）

College of International Education Oxford (CIE) で教鞭を執っているJon De La Fuente氏が来校し、これまでにオックスフォード研修および留学に参加した学生および来学期から留学を希望する学生26名が集まり、ランチパーティがおこなわれた。

本学外国語学部では、長期休暇中に3週間のオックスフォード研修を23年に渡り実施しており、また、昨年からは英語学科グローバルインテンシブクラス(GIC)対象の3ヶ月留学プログラムも開始している。

ランチパーティには本学の坂本ロビン教授、エリック トラウトマン特任講師、ヴァージニア キタ特任講師も加わり、学生たちは積極的に留学に向けてどのような勉強をしていけば良いのか、オックスフォードで勉強することの魅力はどういったものなのかなど様々な質問を投げかけていた。その後、De La Fuente氏は、英語サロンに飛び入り参加し、オックスフォードでの経験を生かし、参加学生を熱心に指導した。



### テキサスA&M大学の学生と交流会

実施日：平成25年6月5日（水）

「TAMU in Tokyo」プログラムに参加し日本語を学んでいるテキサスA&M大学の学生と、本学の学生との交流会が東京都内のレストランで行われた。本学から外国語学部の学生5名（教員1名）、テキサスA&M大学からは学生7名（教員2名）が参加した。この交流会はテキサスA&M大学より依頼があったもので、訪日の目的が日本語学習でもあることから、「日本語教育実習」を受講し、日本語の教え方を実践的に学んでいる5名の学生が参加した。

交流会では、テキサスA&M大学の学生が予め用意していた趣味、旅行、食生活などの質問に関して、本学の学生が答える形で進められた。本学の学生にとっては、日本の文化や生活を客観的に捉える機会となるとともに、日本語を母語としない学習者に分かりやすい日本語で伝える実践的な練習の場となった。

また、この交流会に参加した、テキサスA&M大学の学生1名は、大学卒業後、JETプログラムに参加し、日本で英語クラスのアシスタントとして働くことを希望しているため、6月26日（水）から約5週間、本学英語関連授業や英語サロンでインターンシップをおこなった。



## ○大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制確立

### 1. 各種資料の多言語化

大学のグローバル化の一環として、本学学則、特任教員規程及び就業規則の英語版を作成し、外国人教員を受け入れるための環境整備を行った。また、グローバル人材育成推進事業の中国語版パンフレットを作成し、本学の取り組みを国内外へ広く発信することが可能となった。

### 2. GPA の全学的導入

教育の質保証・成績評価の厳格化およびグローバル化のため、平成 25 年度から GPA を全学的に導入した。全学的に統一した評点記載 (SABC/D) と評価基準を採用することにより、外国語学部学生が他学部講義を受講した際にも評価上の統一が可能となった。さらに、大学のグローバル化、学修時間の確保や単位の実質化などの教育の質保証の確立・推進のほか、海外提携校のさらなる拡充を図り、これらを全学的に普及させる基盤を整えることができた。

### 3. 教員のグローバル教育力の向上

教員のグローバル教育力向上のため、教員の語学サロン受講や e-ラーニングの利用を積極的に推進した。また、中国の協定校から複数の教員を招聘し、本学教員と授業研究・共同授業等を実施した。さらに、クイーンズランド大学(オーストラリア)で開催された FD 研修、「Content and Language Integrated Learning (CLIL): Principles and Best Practice Program」に教員 5 名を派遣し、本学の教員のグローバル化及び英語による教育力と教育支援力の充実を図った。後日、この研修についての報告会を開催し、学内での情報の共有化を図ることができた。

### 4. 職員のグローバル化

教員のグローバル教育力向上と共に、職員においても語学サロンの受講や e-ラーニングの利用を積極的に推進した。また、平成 25 年度には事務職員を対象に TOEIC IP 試験を実施(延べ 128 人の職員が受験し、700 点台は 5 名、800 点台は 4 名、900 点台は 3 名)し、職員全体の英語力の底上げとグローバル化への意識の向上を推進した。

### 5. グローバルシンポジウムの開催

第 2 回グローバルシンポジウム「目指せ 国際人～グローバル人材と国際協力」

日 時:平成 25 年 9 月 7 日(土) 14:00～17:00

場 所:大手町サンスカイルーム(朝日生命大手町ビル 27 階)

参加者:123 名

## 第1部 講演会

講演者: 芦沢真五氏(東洋大学国際地域学部教授)

関乃平氏(東洋美術学校中国水墨画科主任教授)

## 第2部 パネルディスカッション

パネリスト: 武下悌治氏(JICA 青年海外協力隊事務局長)

近藤美智子氏(天使大学栄養看護学部非常勤講師、杏林大学大学院国際協力研究科修了)

池田尚広氏(日本中国文化交流協会、杏林大学大学院国際協力研究科修了)

石原恵氏(世界の医療団、杏林大学大学院国際協力研究科修了)

まず、開会の挨拶として跡見裕学長は、平成24年度に採択された本学のグローバル人材育成の取り組み、および成果について、またグローバル人材とは「日本人としてのアイデンティティを大切に、異文化を尊重し、正義・熱意・永続的な信頼関係の下、世界の人々と対等な関係を築いていくことが大切」と述べた。

第1部講演会は、ポール スノードン副学長による進行の下、招待講演者である芦沢真五氏(東洋大学国際地域学部教授)から「大学の国際化戦略と『ひと』『もの』『かね』—持続的なグローバル人材育成のために—」と題し、講演いただいた。

その中で、5カ年事業である文部科学省採択のグローバル人材育成推進事業が終了した後、いかに大学内で予算を確保し事業を継続していくのか、学内での国際交流センターのあり方や職員のゼネラリスト兼専門化の必要性について国内外の大学の取り組みを紹介し、具体的な提言をいただいた。

特別講演の関乃平氏(東洋美術学校中国水墨画科主任教授)は「中国の文化・芸術の発信と異文化理解」について、中国語で講演され、フリーの通訳者として活躍する川端 谷津子氏(杏林大学大学院国際協力研究科修了)が逐次通訳を行った。

昨今の好感度調査によると日中それぞれ、双方に対する好感度が低下する中、関氏は芸術・文化、教育交流には双方の繋がりを深める力があることを論じた。

日中交流の懸け橋となった日本画家の巨匠達について、現代の日本人より中国人の方が詳しいことや、来日した中国人は日本人の国民性を高く評価する傾向があるなど、芸術・文化交流が相互理解に役立つと述べると共に、人と人とのつながりを育てる人間力がグローバル人材であると言及された。



芦沢真五教授



関乃平教授



第2部は、まず司会の神谷茂医学部教授から、本学の十数年に及ぶ JICA 感染症研究対策プロジェクトへの調査団員派遣やケニア人研究者の受け入れ等、JICA との緊密な協力関係について説明があった。

その後、基調講演として、武下悌治氏(JICA 青年海外協力隊事務局長)から「青年海外協力隊とグローバル人材」と題し、講演いただいた。世界 88 か国、37,000 人以上の支援者派遣の実績を持つ JICA では、派遣前に 170 時間以上の現地言語の学習や文化・安全対策等に関する研修が実施されている。しかし、現地での厳しい生活環境、異なる言語・文化の中で予測できない事態に直面することも頻繁にあり、その問題を解決するためには、現地の人と同じ目線で生活し、絶え間ない対話と信頼関係の構築、共に取り組む姿勢が大切であるため、その能力を備えてこそ、グローバル人材であるとお話いただいた。

続いて、北島勉総合政策学部教授のコーディネートの下、3 名のパネリストによる体験発表と意見交換が行われた。

石原 恵氏(看護師、杏林大学大学院国際協力研究科修了)は、医療保健分野を中心とした国際的 NGO メデュサン・デュ・モンドの日本支局に所属し、途上国にて形成外科の修復プロジェクトに参加した。国際人に必要な要素として、適応力・応用力、コミュニケーション能力、危機管理能力(安全面・精神力・体力)、マネジメント能力、広い視野と広い心を持つことを挙げた。

池田 尚広氏(通訳者、杏林大学外国語学部卒業、大学院国際協力研究科修了)は、日本中国文化交流協会にて、日中交流を促進する展示会や座談会等にて通訳を担当している経験から、プロの通訳者にとって大切な要素として、高いコミュニケーション能力による信頼関係作り、チームワーク力、時事問題・国際情勢へアンテナを張ることを挙げた。また、杏林大学の後輩達へ、多少難しいと感ずることで、度胸を持って取り組んでほしいとエールが送られた。

近藤 美智子氏(天使大学看護栄養学部非常勤講師、杏林大学大学院国際協力研究科修了)は、JICA の国際緊急援助隊医療チームの一員として、自然災害の発生した途上国での救援活動に参加した経験から、グローバル人材に欠かせない要素として、相手の話を聴き対話ができる力、自分が何をすべきか判断し実行できる力、現地・周囲の人々と協働できる力について話された。

その後のパネルディスカッションでは、「現場での困難な体験を克服する原動力とは」という問いに、「責任感や自身・チームの成長を実感すること」、「先輩の応援、成果を必ず出すという心構え」、「援助への使命感」という答えがそれぞれ挙がった。

「経験を通して感じる日本人としてのアイデンティティは」というフロアからの質問に対しては、「細やかな気遣いをした際に、その日本らしさに感謝をされた」、「被災地で日本人の医師を指名して、遠方から訪問する患者がいた時に、日本人ならではの丁寧で優しい対応に客観的に気づかされた」、「中国語では訳しにくい日本の奥ゆかしさを表す表現に出会う」という回答が挙がるなど、活発なディスカッションが繰り広げられた。



パネリスト(左から武下氏、近藤氏、池田氏、石原氏)



### 第3回グローバルシンポジウム「グローバル人材に求められる英語力・中国語力・日本語力」

日 時:平成 26 年 3 月 15 日(土) 14:00～17:00

場 所:大手町サンスカイルーム(朝日生命大手町ビル 27 階)

参加者:138 名

#### 第1部 講演会

講演者:崔希亮氏(北京語言大学学長)

高尾潤氏(NHK ニュースキャスター)

#### 第2部 パネルディスカッション

講演者:寧一中氏(北京語言大学外国語学部長)

パネリスト:関立丹氏(北京語言大学日本語学科長)

エンピカandel氏(株式会社トモノカイ、杏林大学総合政策学部卒業)

澤田タッカー美子氏(株式会社電通、杏林大学外国語学部卒業)

3月15日(土)、大手町サンスカイルームにて第3回グローバルシンポジウムが「グローバル人材に求められる英語力・中国語力・日本語力」というテーマで開催された。今回は第1回に続き、同時通訳ブースが設けられ、基調講演者の言語に合わせて日中英 3 言語の同時通訳を入れて行われた。晴天に恵まれ、本学の学生・教職員、一般など 138 人が参加し、第一部・二部合わせて大変盛況となった。

開会の挨拶では跡見学長より、グローバル人材育成推進事業の採択からこれまでの本学の取り組みについて説明があり、さまざまな活動が海外留学を希望する学生の促進や協定校の拡充に繋がり、また、これらの動きが学内全体に波及していることを紹介した。

崔希亮 北京語言大学学長は「グローバル化に対応できる人材の育成」として、中国における海外からの留学生の推移や人数等の具体的な統計を基に解説し、北京語言大学でのグローバル人材育成の取り組みについて中国語で紹介した。

第1部の最後に高尾潤 NHK ニュースキャスターは「なぜ英語だけでは駄目なのか？」として、世界で活躍できるグローバル人材に求められる共通言語の英語力プラスαの能力を身につける事の重要性について、自身の海外留学や海外特派員の経験を基に解説した。



杏林大学 跡見 裕 学長



北京語言大学 崔 希 亮 学長



高尾 潤氏(NHK ニュースキャスター)

第2部は、北京語言大学の寧一中学部長より英語による基調講演、関立丹日本語学科長より日本語でパネリスト特別発言を頂き、それぞれ中国や北京語言大学における外国語教育について歴史的背景に沿って詳しくお話しいただいた。続いて、パネルディスカッションは本学卒業生のエンピ カンデル氏(株式会社モノカイ、杏林大学総合政策学部卒業)が「世界で活躍する人財とは～グローバル人材に求められる言語力(日本語力)」として自身が留学生として外国(日本)で学んだ立場から、語学力は言葉だけではなく文化を知るという事、また母語の大切さについて説明された。澤田タッカー美子氏(株式会社電通、杏林大学外国語学部卒業)は「グローバル人材に求められる語学力」というトピックでご自身の経験談を基にビジネスで使える語学力に加えて、仕事力や専門知識の重要性について意見を述べられた。その後、パネリストへの質疑応答では来場者とパネリストとで活発な意見交換が繰り広げられた。



北京語言大学 寧一中 外国語学部長



パネリスト (左から関日本語学科長、エンピ氏、澤田タッカー氏)

最後に塚本慶一国際交流センター長から講演者及びパネリストへの御礼の言葉をもって閉会となった。今回のシンポジウムによって更に明確化された、杏林大学が目指すべきグローバル人材の育成に向けて、今後も大学全体で取り組んでいくこととした。

## ○対外広報の展開

### 1. 大学 HP にグローバル事業特設サイトを構築

本事業に係る概要や実績・進捗状況等を、国内外の大学、社会や高校生等を対象に広く発信することにより、本事業の今後の展開及び学生の海外留学の促進に資するため、ウェブサイトの再構築をおこなった。

本学の語学教育プログラム、本事業の一環で新設した学習施設の様子などが掲載されており、また、海外協定校との交流をはじめ、各種イベントやセミナーの情報なども随時アップロードされている。



特設サイト:<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/feature/global/>

### 2. 学内サイトの立ち上げ

本学教職員にむけて事業の進捗状況を随時発信していくため、学内サイト「あんず Net」において、国際交流課のサイトを立ち上げた。海外出張報告書、本学国際交流委員会および本事業推進委員会の議事録等を随時アップロードしている。

### 3. 本事業紹介パンフレットの作成

産業界、受験生(保護者を含む)、高等学校教員に向けて、事業採択からこれまでの取り組み・実績を外部に広く発信するため、新パンフレット『Let's Go Global!』を作成した。また、英字新聞『Kyorin Times』を作成し、本学在校生および海外からの訪客に配布した。

『大学案内』(中国語)

『平成 25 年度グローバル人材育成推進事業成果報告書』(日本語)

『Let's Go Global!』(日本語)

『Kyorin Times』(英語)



### 4. シンポジウムの開催告知

シンポジウム開催前には、本学の取り組みを社会に広く発信するため、フライヤー送付による開催告知をおこなった。通常、首都圏の大学・高校・企業を中心に発送しているが、第 3 回シンポジウム「グローバル人材に求められる英語力・中国語力・日本語力」においては、中国語科目を設置している高等学校への告知に重きをおき、本学の取り組みをアピールした。

### 5. 入試の取り組み(AO 入試、資格取得者入試、帰国子女入試)

語学力を向上させるための入学時から卒業時までの一体的な取り組みとして、入試における中等教育段階までの外国語力、留学経験等の適切な評価を行った。具体的には、課題のやり取りを通じ学習成果を評価する「AO 入試」、語学検定試験の資格やスコアを利用する「資格取得者制推薦入試」、留学経験・在外経験を評価する「帰国子女入試」等で、入学以前の語学力や海外経験を最大限評価した。

## 平成 26 年度事業計画

### 1. 平成 25 年度の実績報告を取り纏め、点検・改善を加え、平成 26 年度の事業展開を推進する

- ・プログラム推進委員会(毎月開催)で、平成 25 年度の事業報告を取り纏め、点検する。さらに、第三者評価機関から評価・助言をいただき、平成 26 年度事業の改善・展開を推進する。
- ・検証可能なグローバル人材の定義及び成果の測定方法を確立する。
- ・本事業を推進するためのグローバル専門職員を雇用する。(継続)

### 2. 外国語力の強化を図る

- ・語学教育を強化するため、独自教材(CIC、PEP、同時通訳等)の改良・開発を進める。
- ・中国語・英語サロン、語学の e-ラーニングを、正課授業との連携を強化して学習効果を高めていくほか、その利用を教職員・他学部生にも拡大する。また海外 TV ニュース番組(英語・中国語)が常時視聴できる環境を維持する。
- ・語学検定試験により語学教育・学習の成果を測定・分析し、語学クラス分け及び今後の語学教育の改善に資する。

### 3. スマートでタフな交渉能力の養成及び能力の可視化を図る

- ・第三次中期計画の教育開発部会と連動し、PBL(課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングの実施をさらに展開し、点検・改善を加える。
- ・スマートでタフな交渉能力の「測定・評価方法」を実施、改善する。(セミナー、研究会等への参加)
- ・プログラム終了プレゼンテーション、卒業研究報告会を開催し、外部評価委員を含めた評価を行う。

### 4. グローバル理解を深め、本事業の深化を図る

- ・グローバルセミナーは、国内外の有識者や、グローバル産業界で活躍している方(卒業生を含む)を講師として招聘し、主に学生・教職員を対象に開催する。(年 6 回開催)
- ・グローバルシンポジウムは、産官学の有機的連携により、国内外の有識者による講演のほか、本学教員・学生を含むパネルディスカッション等を行い、グローバル人材として求められる素養等について考察を行い、事業の深化を図る。(年 2 回)
- ・大使館訪問・交流では、各国の事情(経済・産業、歴史・文化、日本との関係等)について理解を深める。

### 5. 海外協定校及び留学プログラムの拡大・充実、海外インターンシップを推進する

- ・中国語圏及び英語圏の大学との協定の拡大を図るとともに、留学プログラム(インターンシップを含む)の開発をさらに進める。
- ・教職員が学生の留学先の大学を訪問・滞在し、教育プログラムの確認・調整を行う。
- ・学生の「留学による成果」を測定するシステムを開発する。
- ・事業配信システムにより、海外留学中の学生に、学内での授業「キャリア開発論」等を配信する。(継続)

#### 6. 大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制を確立する

- ・FD や SD、海外研修等により教職員のグローバル化を推進するほか、職員の語学力向上を図る。
- ・海外協定校等から教員を招聘し、授業を担当していただく。
- ・GPA 等による「単位認定の質保証」、また学修指導へ活用方法を推進する。
- ・学習ポートフォリオ等を活用し、学生の学修時間確保を推進する。(セミナー、研修等参加)

#### 7. 本事業(留学促進、語学強化等)を中心とした学内外への情報発信の展開

- ・本事業のポータルサイトのリニューアル、情報の更新を行う。
- ・本事業による留学実績、語学強化等の進捗及び成果を広報・発信するため、ニューズレターを作成し配信する。
- ・新聞等のマスメディアによる広報・広告を実施する。
- ・GHRD 関係他大学との情報交換、情報発信の場を活用する。

#### 8. 日本発信プロジェクト事業を継続・展開する。(ニュージーランド、アメリカ等)

### 今後のグローバル化に関する計画

杏林大学は 2016 年 4 月、三鷹市に新キャンパスを開設し、八王子キャンパスにあるすべての学部・研究科は井の頭キャンパスに移転する。人文・社会科学系の学部ではカリキュラムの国際化および再整理を行うとともに、海外協定校を拡大して学生の海外留学を必修化するなど、一層のグローバル化を推進することが計画されている。



## 平成 24 年度事業評価

### —第三者評価委員会の開催概要—

日 時 平成 25 年 8 月 27 日(火) 14 時～16 時

場 所 杏林大学三鷹キャンパス本部棟 11 階貴賓室

第三者評価委員(敬称略) 内田 勲(横河電機株式会社 最高顧問)

ブルース ストロナク(テンプル大学ジャパンキャンパス 学長)

木村 英樹(東京大学大学院人文社会系研究科 教授)

#### 1. 総括的評価

平成 24 年度は半年足らずの実施期間であったが、数多くの取組みを行ったことは評価できる。事業推進体制の構築、語学教育・学習環境及びアクティブラーニング教室等の整備を行い、その活用実績も高く評価できる。

ただし、本事業の狙いである「人材育成」については、事業期間が短かったこともあり、必ずしも十分な成果を確認するに至らなかった項目も見受けられた。

委員会では、取組み項目ごとの点検・評価を加えるとともに、平成 25 年度以降は、平成 24 年度に整備した環境を十分活用し、「グローバル人材育成」が大きな成果を創出することを期待し、以下の助言を行う。

#### 2. 項目別評価・助言

##### (1) 卓抜した語学力養成のための環境整備

留学生を TA・SA としてうまく取り入れており、学習サポートを行っている点や、語学サロンの利用者が述べ 300 名以上足を運んでいる点は大変評価できる。しかし、語学サロン等の活用を通じて、会話力およびコミュニケーション能力の向上、そしてアウトカム評価の方法を検討することが望まれる。

更に、ネイティブスピーカーの教員が増えたという点や、英語教育に関しては 1 クラス 5 人という少人数教育も実施しており、評価できる。外国語学部では、この例を参考に、現在 3 クラス 10 名弱となっている中国語学科の少人数制クラス対策にも取り組んでいる。

##### (2) 教育的支援およびスマートでタフな交渉能力養成のための環境整備

アクティブラーニング教室の整備を完了し、25 年度からは週 1,800 分(20 コマ)以上の稼働率は素晴らしい。「卓抜した語学力」を育成する方法として、ただ言葉ができるだけではなく、その裏付けとしてその国の文化や歴史について理解をした上でこそ語学を操ることができるようになるのである。「知識」が卓抜した語学力の強化に必要である、という点から、ケーススタディ演習で取り上げるトピックは今日的な内容のみならず、歴史的な事や文化なども取り入れ充実していくことが大事である。

##### (3) 協定校開拓・交流事業の拡大

今後の目標である 5 年間で 50 校まで協定校を拡大することによる、留学生の受入れという受け皿に

なる部分がとても大変であることが想定される。留学生の受入れに関わる授業料などの経済面等について、協議していく点が多くある。特に英語圏からの留学生の受入れに向けたカリキュラムの整備が必至である。

一方、中国語圏からの留学生は通訳および翻訳の日本語の部分を主に勉強しに来ているが、総合大学である杏林大学の特色である言語のみならず、総合政策学部 of 社会系の科目や昨今、関心を集めている医療系、介護、環境保護等の科目を保健学部から履修できるが、今後、単位の付与ができるようになることが望ましい。

#### (4) 在学生の海外留学促進・支援

留学プログラムの多様性という点で、現在、既に医学部にて臨床クラークシップで4週間の海外留学をしてきた学生の単位認定の実績はあるので、今後もそのシステムを広げて多様化していく事ができる。

また、キャリア支援の面においても産業界との連携が重要である。杏林大学が掲げるタフでスマートなグローバル人材を評価し、採用するのは企業側であると言える。企業や産業界の人たちに受け入れられ、評価されるグローバル人材とは何かを明確にし、杏林大学が目指すグローバル人材とは何かを見つけていく事で5年後の目標設定ができるのではないかな。まずは、企業側が評価／採用しやすい方法として、学生時代にインターンシップなどの実習を行い、単位がもらえるプログラムの開発が5年の間に必要である。

#### (5) 大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制確立

大学のグローバル化という点に関して、グローバル人材育成推進事業の留学生(日本人および外国人)の人数設定や語学レベル等の数値目標は設定されており、少しずつ成果が出ているが、「スマートでタフな交渉能力」をどのように評価していくかが明確になっていない。GPA(Grade Point Average)制度の導入は大変すばらしい。今後はこのGPAシステムを使う事で学生の為にどのように活用して行けるかが評価されていく点なので、明確にすることが大切である。

国際交流課の設置とともに語学能力を有する国際交流課職員の配置はできているが、今後ネイティブの職員を採用する事を提案する。具体的な方法案として、海外の協定校から教職員を派遣してもらう事で、海外の協定校との連携強化にもつながるのではないかな。

また、職員のグローバル化という観点からも、海外大学を訪問する国外出張等に関しては、先方の担当者との顔合わせや今後の業務上での連携強化のためにも教員と共に事務職員も同行することが望ましい。

今後の広報活動の重要課題として、これからの入学者(高校1年生、中学生)を対象に積極的に広報活動を行い、八王子近辺だけではなく、2016年の移転後を意識し、井の頭キャンパス近隣の中高へのPRを行い、優秀な学生の確保に努める必要がある。杏林大学での、グローバル人材育成推進事業への取り組みについて、更に周知する事が非常に重要である。

以上